
kirakira cafe

kanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

k i r a k i r a c a f e

【Nコード】

N 1 4 8 0 V

【作者名】

k a n o n

【あらすじ】

毎日、大勢の通勤、通学客で溢れる駅前に、小さなカフェがある。四十半ばのマスターが経営するその店は、お洒落で、居心地が良くて、バイトの女の子も可愛くて、宇宙のお気に入りウツネの場所。のはずだった。ところが、ある日、久しぶりに訪れた宇宙の席にメニューを持って来たのは、全く知らない、男性店員だった。とろけるような笑顔で接客する彼の評判はあつという間に広がり、店の前には大行列。

お気に入りの場所を奪われた悔しさで、全く罪のない新入りを毛

嫌いしていたが、カフェに通ううちに、少しずつ、宇宙の気持ちに
変化が現れる……。

新入り（前書き）

お気に入りのカフェ、って言える店、まだないんですね。

こんなカフェがあったらいいな、と思って書きました。

読んだあと、温かい気持ちになれるようなお話になっていれば、嬉しいです。

新入り

駅前のカフェで、仏頂面をした客が一人。それを呆れた顔で眺める友人が一人。別に、席に着くまでイライラするほど待たされたわけでもなければ、頼んだ紅茶がなかなか出て来なかったわけでもないのに。モダンとアンティークが雑多に散りばめられた店中は、インテリア雑誌で何度も取り上げられるほどお洒落で、窓からの採光と照明のバランスも絶妙。暑くも寒くもなく、誰もが心を和ませるヒーリングミュージックが流れる中、飾られた観葉植物は手入れが行き届いて瑞々しく、マイナスイオンもたっぷり。で、居心地は最高、のはずだった。先月までは。宇宙は、飲みかけたアールグレイのアイスティーに、更にミルクとシロップを継ぎ足し、わざと大きな音を立てて掻き混ぜた。

「まあ、よくあることだと思うよ」

見かねた大貴が、珈琲を啜りながら、そう言った。

「確かに、おまえの気持ちも、わかるけどさ」

「……、」

宇宙はやり場のない怒りを、目の前の大貴に向けて睨んだ。

「四月なんだし、人が入れ替わるのは、仕方ないだろ？」

頭では、解っている。しかし、どうしても、許せない。

「まあ、千歩譲って、人が入れ替わるのは認めるよ。でもさ、替わりが男ってひどいよね」

「うん、そこは、俺もそう思う」

目の据わった宇宙をなだめるように、そう相槌を打ってくれた。

宇宙がこれほどまでに怒っている理由は、お気に入りのこのカフェで働いていたお気に入りの女性店員が、宇宙に何の断りもなく辞めてしまったことだった。

「好きだったのに、」

溜め息混じりに、そう言ってしまった。千賀という名前のその女

性店員は、マスターと二人だけでいつも忙しいにも関わらず、どんな客にも愛想が良かった。些細なことですぐ不機嫌になり、当たり前散らす宇宙の元カノとは、比べるのも失礼だ。それをうつかり口にしてしまって、別れるハメになったのだが。

「どうせ、告白したって、フられてたよ。傷つく前に消えてくれて、良かったってことにしろよ」

大貴の一言で、宇宙の怒りは極限に達する。怒りのあまり、言葉が出て来ないという状態を初めて味わいながら、宇宙は残りのアイステイーを一気に飲み干した。

先月、大学を卒業して、この不況の最中、運良く社会人になれた。日本国内どこでも、海外転勤でも、構いません！と、心にもないセリフで、面接官の心を掴んだらしい。それで、忙しく取引先を飛び回る、営業マンになることを想像していたのだが、辞令を見て、ビックリ。なんと、インテリアアドバイザーという、全く畑違いの職種だったのだ。宇宙が入った会社は、そこそ有名な家具メーカー。元は家具だけだったらしいが、今はカーテンや絨毯、照明器具に始まり、キッチン、洗面台、便器……、要は、生活するに必要なものを手広く扱う会社だ。よく調べなかった宇宙も悪いが、ここ数年、インテリアコーディネートの分野でも業績を伸ばしていて、そつちの人材を補うための求人だったようだ。文学部だった宇宙に、そんな専門知識があるはずもなく、渡された分厚い教科書を眺める日々。他の新入社員は皆、建築やデザインを学んできた者ばかりで、どう考えても、この配属は間違っていると思えなかった。

そんな不本意な新社会人が、唯一の楽しみにしていたのが、このカフェでのひととき。ひっきりなしに人が行き交う駅前にありながら、中に入ると、瞬時にその喧噪から逃れられる。それは、壁の防音性能が素晴らしいとか、そういう物理的な理由からではなく、中で働く店員が素晴らしいからだ。宇宙は信じていた。客の立場に立った温かみのある接客と、いつまでもいたくなる落ち着いた店内

が、一つの小さな世界を作り出しているからだ。

『宇宙くん、テストどうだった？』

『ねえ、ちよっとだけ、お皿運ぶの、手伝って？』

『風邪ひいたの？こんなとこにいないで、早く寝なきゃ、』

会社とアパートを行き来する、新しい移動経路からは外れてしまったが、今日も前に来たときと変わらず、幸せな気分になれると思っていたのに、宇宙の席にメニューを運んできたのは、見たこともない男だった。同年くらいだろうか、ふんわりとした印象の、美青年。すっかり常連になっていた宇宙は、すかさずマスターに尋ねる。

「ねえ、千賀ちゃんは？」

「残念でした。先月いっばいで、辞めたんだよ。宇宙くんと同じで、新社会人になったから」

その答えに、宇宙はこの世の終わりを見た気がした。シヨックのあまり、二の句が告げられずにいると、

「千賀ちゃんはいなくなっただけだし、またしよっちゅう来てよ」

空いたテーブルを拭きながら、簡単にそんなことを口にするマスターには、宇宙にとって千賀の存在が、どんなに大切だったか、解っていないようだ。俯いてしまった宇宙に気付いて、マスターはようやく片付ける手を止め、

「就職先、ここから近いから、帰りに寄ってくれるみたいなこと、言っただし」

今度はそう言って、僅かな希望の光を与えてくれた。再び顔を上げた宇宙を見て、解りやすいな、と笑う。おまけに、新入りの店員にまで、笑われてしまった。彼にしてみれば、全く迷惑な話だが、再び不機嫌になった宇宙は、

「感じ悪い、」

聞こえるようにそう言って、窓の外に目を向けた。

ところが、次にカフェを訪れた時、思いもよらない事態が宇宙を

待ち受けていた。何と、店の外に、大行列。今までも、雑誌に紹介されたりして、休日の昼間は三十分待ちを覚悟しなければ入れなかったのだが、ここまで並んでいるのは、初めてだ。しかし、千賀が来るかも知れないと思うと、引き返すこともできず、その最後尾に並ぶ。待っている客も、中にいる客も、殆どが女性で、近くでアイドルか何かのイベントでもあったのかと想像していると、

「可愛い〜！あの笑顔がたままない、」

「幾つだろう。大学生かな、」

縦長の窓から店内を覗きながら、そんな会話をしているのが聞こえる。可愛い？誰が？もしかして、また女の子を雇ったのでは、と期待して、宇宙も隙間から中を覗いてみた。すると、フロアまで出てきていたマスターと目が合う。宇宙を見つけるなり、手招きして中へ入って来い、と、身振り手振りで伝えた。

「悪いけどさ、ちょっと手伝ってよ」

しょっちゅう来てるんだから、勝手は解ってるだろ？と、強引に、宇宙を厨房へと引き込む。

「手伝うって、何を？」

「皿洗い。イヤなら、フロアで接客。どっちでもいいからさ、」

給料二割増で払うから頼むよ、と手を合わされて、断ることも出ず、宇宙は渋々、皿洗いを引き受けた。どうやら今日も、ここで癒しを得ることは、できないらしい。洗っても洗っても減らない食器にうんざりしながら、自分がこんな目に遭っている元凶であるに違いない、新入りのほうを睨んだ。何処の劇団員か知らないが、女性客のテーブルで床に片膝をつき、それこそとろけるような笑顔で注文を聞いている。

「あの子が入ってから、急に忙しくなってきた。有り難いことだけど、二人じゃ回らないよ」

じゃあ、クビにして、新しい女の子を雇えばいいのに。宇宙は心の中で呟きながら、黙々と珈琲カップを洗う。

「でも、すごい頑張り屋なんだ。メニューは持って帰って一生懸命

覚えて、もう殆ど、間違えないし、調理師免許も持つてるから、料理のほうも頼めるし、何より、接客が上手いよ」

正しく、ベタ褒め。それでますます、彼に対する敵対心が高まりました。

「将来は、自分の店を持ちたいんだって。そのための修行なんて、偉いよな」

そんな店、誰が行くもんか。宇宙はまた、心の中で、呟いた。

新メニュー

ゴールデンウィークが終わるとともに、研修期間も終了して、五月病になっっている余裕もないほど、忙しい日々を送っていた。少数精鋭、とは良く言ったもので、こんな少人数で捌ききれぬのかと心配になるほどの見積依頼が来る。個人の戸建て住宅やマンション、新しくオープンする店舗など、規模も客層も様々だったが、共通していることは、一日も早く見積を、と口にする事。何をそんなに急ぐのか、サツパリ解らなかつたが、客からの依頼は最優先しろと口うるさく言われているため、新人に限らず社員たちは皆、黙々と作業を進めていた。

「疲れた」。今日こそは、日付が変わる前に帰りたいよね」

同期の美紀子^{みきこ}が、うーん、と体を伸ばしながら言った。彼女は大学で建築設備関係を専攻していた流れで、今は照明計画や、配管計画などを担当している。

「あーあ。頑張って働いたって、何の楽しみもないなんて、つまらないよな」

宇宙は思わず、そう呟いた。すると美紀子が思い出したように、「そういえば、宇宙くんが言ったたカフェ、こないだ行ってきたよホント、遠くても行く価値あるわ」

うつとりと言う様子に、宇宙はまた、腹が立ってくる。結局、あの日は閉店間際まで働かされ、足が棒になってしまった。癒しを求めて通っていたはずの場所で、労働させられるとは、思ってもみなかった。

「平日の午前中だったから、全然混んでなくて、マスターや相沢^{あいざわ}さんと話しちゃった」

あの新入りは、相沢、という名字なのだ。マスターが下の名前ではかり呼ぶせいで、宇宙の中にもあの忌々しい名前が定着してしまっている。

「宇宙くんがお気に入りで言うの、すごく解るわ。ミルクテイも美味しいし、お店の雰囲気も、すごく良いもん」

それは、三月までの話だよ。そう言いたかったが、あまりにもあの店を気に入った様子に、ぐっと堪える。

「でも、綺羅きら、なんて、素敵すてきな名前よね。相沢さんに、ピツタリ」
店じゃなくて、男を気に入っただけか。宇宙は呆れて、そのにやけた顔を見つめる。しかし、直後に、狙った獲物は逃さないんだから、と言った時の目が本気なのに気付いた宇宙は、何だかゾツとして、再びパソコンに向かった。

宇宙の勤める会社は、休日が水曜日と、日曜日。連休が欲しい人には辛いかも知れないが、特に連休が必要な旅行の趣味もない宇宙には、意外と合っている。疲れがたまってきた頃に休めるのは、有り難かった。それに、車のディーラーに就職した大貴も水曜と木曜が休みで、今まで通り、二人で遊ぶにも丁度良い。急かされていた見積も終わり、久々に思う存分寝て、昼過ぎに起き出した宇宙は、大貴を誘って駅前のカフェに向かっていた。

「平日は、大したことないんじゃない、」

昼時をとづくに過ぎていたからか、並ばずに入れた。ドアが閉まった瞬間、これまでと同じように喧噪から切り離され、穏やかな空気に変わったことに気付いて、宇宙は途端に悔しくなる。店員が誰でも同じだとは、認めたくないのに。また仏頂面になって席に着くと、

「そんなにイヤなら、来なさいいいのに、」

大貴が呆れたように言う。そこへ、相沢がメニューを持って現れた。

「いらっしやいませ」

まあ、男女の差別をしないところだけは、評価できる。この間、女性客に向けていたのと同じように、とろけるような笑顔で宇宙と大貴に会釈をした。そっとウォーターグラスをテーブルに置くと、

また後ほど参ります、と、上品な口調で行って、厨房のほうへ戻って行った。大貴はそれを、ジッと見ていたが、

「感じ良いじゃん。丁寧だし。何が気に入らないんだよ？」

そうやって、周囲が甘い評価をするところだよ、と言いつつになつて、憮然とメニューを開く。見なくたって、何が何処に載っているのか、全部暗記しているのだから、そうする必要もないのに……。「あれ？」

思わず、声を上げていた。メニューに、見たことのないケーキが一種類、増えていたから。丁度厨房から出てきたマスターを呼び止め、

「ねえ、こんなケーキ、前からあつたっけ？」

するとマスターは、にやり、と笑って、こう言った。

「ああ、やっぱり宇宙くんが選ばれたんだな」

「……選ばれた？」

「うん。綺羅の作ったケーキをメニューに載せるかどうかのテスト。この店で、一番厳しいお客さんに食べてもらって、感想を聞きたい、ってね」

「……、」

そのために、わざわざ、一つだけ新しいメニュー冊子を作ったらしい。

「そういうわけだから、今日だけ、協力してやってよ。ケーキの代はいらないからさ、」

強制労働の次は、これが。どうしてあいつは、次から次へと攻撃をしかけてくるんだろう。次は何だ？被害妄想も甚だしかったが、宇宙はまた不愉快な気分になり、溜め息をつきかけた。が、ふと思いついて、メニューを閉じる。ハッキリ、マズいって言うてやればいいんだ。……ところが。

「こんな美味しいケーキ、初めて食べたよ」

大貴はそれほど甘いものが好きではないはずなのに、そう感想を述べた。

「……フツウだよ、こんなの」

悔し紛れに言ってみたが、実際は、宇宙も大貴と全く同じ感想だった。クリームの爽やかな甘さと、フルーツソースの香りが絶妙で、スポンジもフワフワ。食後なのにも関わらず、もう一つ食べたくなくなるような、そんな味だった。しかも、食後の飲み物を注文した覚えがないのに、ちゃんと、大貴には珈琲、宇宙には、アールグレイのアイステイーが運ばれてきたのにも、驚いた。点数をつけると言われたら、間違いなく、満点。だったけど。

「いかがでしたか？お口に合いましたでしょうか？」

おっとりとした口調に、とろけるような笑顔で尋ねられて、つい、意地悪な心が芽生える。

「マスターが横で聞いているのに、悪く言えるわけないじゃん。もっと他のお客さんでも試したほうが、いいんじゃないの？」

すると、相沢はさすがに驚いたような顔になり、ジッと宇宙の目を見つめる。しばらく見つめ合って、決まりが悪くなってきた頃、
「……そう、ですね。もっと、頑張ります。ありがとうございます
た」

そう言って、深々と、お辞儀をした。

「なんであんなこと言っただよ？可哀相だろ？」

店を出るなり、大貴が咎めた。宇宙も、大人げなかったとは、思う。後味が悪い、とは、まさしくこのことだった。弁解もせず黙ったままの宇宙に、大貴はさらに、

「あいつだって、新入社員みたいなもんなんだよ。慣れない環境で、一生懸命、頑張っただろうに。宇宙だって、徹夜で作ったブレゼンをあんな風に言われたら、ショックだろ？」

黙って、頷く。

「今からでもいいから、もう一回戻って、ホントは美味しかったって、言っただれよ」

しかし、その言葉を素直に聞き入れられるほど、穏やかにはなれ

なかった。

「何だよ？どつちの味方なんだよ？千賀ちゃんがいた頃は、あの店に行つてこんなイヤな気分になつたことなんて、一度もなかった。それなのに、あいつが来てから、ろくなことがないよ。だから、ちよつとくらい、意地悪してやつたつていいだろ？」

開き直つた宇宙の言葉に、大貴は呆気にとられたような顔をしていたが、やがて声をたてて笑つた。

「理不尽すぎて、ビックリだな。完全な八つ当たりじゃないか」

あいつも気の毒に、と、また相沢の肩を持つ。

「とにかく、あの店のメニューに載せるなんて、まだ早いんだよ。

俺は絶対に、認めない」

宇宙は、そう言い放つた。大好きだったカフェが、突然やってきた新入りに汚されていくのが、許せない。気に入っていた壁の色を、勝手に塗り替えられてしまったような気分だった。

「まあ、おまえの気持ちも、解るけど、」

宇宙がどんなにあのカフェを気に入っていたかを知っている大貴は、またそう言つて慰めてくれた。

見えない壁

毎週のように続いていた休日出勤を、何とか午前中だけで終わらせた宇宙は、いつもなら真っ先に向かっていた駅前のカフェには行かず、会社の近くにある、大手の珈琲ショップで昼食をとることにした。宇宙の意地っ張りのせいで、あんなに好きだった場所に行き辛くなってしまうって、まるで恋人に会いたいののに、会えない時のような寂しさだ。そんな時間の中で、宇宙はようやく、あることに気がついていた。宇宙が好きだったのは、あのカフェなのだということ。もちろん、可愛い店員のいる店なら、尚更良いのだが、空いた時間を気兼ねなく、心地良く過ごせる、あの空間。相当お洒落な店なのに、四十半ばのマスターは全く気取ったところがなく、庶民的で、気さくで、友達かと勘違いしてしまいそうになる。おまけに、料理もスイーツも文句なしに美味しい。……………スイーツ、か。ずっと、心にひっかかって、スッキリしない訳は、解っていた。相沢が出してくれたケーキと紅茶は、本当に美味しかった。もしかしたら、マスターが作るそれよりも、上かも知れないと、思えるほど。マスターの料理に感じるのが、万人に向けての愛情だとすれば、相沢の作ったケーキに込められているのは、目の前の、一人の客に向けての愛情。そんな真っ直ぐな気持ちを、踏みにじってしまった気がして、ずっと気に病んでいるのだった。

ようやく注文する順番が来て、カウンターの前まで行ったが、宇宙はくるりと背を向け、店を出た。梅雨に入って、外は連日、雨。今日も、傘をさしても濡れるほどの土砂降りだ。それでも、宇宙は、二駅も遠い、行きつけのカフェへと向かった。

丁度昼時とあって、雨にも関わらず、平日とは思えない人の列。また手伝わされるのはご免だと思った宇宙は、傘で顔を隠すようにして、その列に並んだ。傘が雨粒を弾く音に混じって聞こえて来るのは、やっぱり、相沢の話題。女子の口コミの威力を見せつけられ

た気分だった。

ジーンズの裾が、跳ね返る水滴で不快に湿ってきた頃、ようやく店内に入れた。厨房のマスターは相変わらず忙しそうで、何だか手伝わぬことが罪に思えてくる。が、宇宙は心を鬼にして、空いている席に座った。

「いらつしやいませ、お待たせ致しました」

こんなに混雑していても、不思議と、流れる空気は穏やかだ。明るすぎない照明と、手作り風の木目の効いたテーブル、それに所狭しと並んだ観葉植物たちが生み出す、森の中のような清々しさ。天井から吊り下げられたアイビーやポトスが落とす影は、気持ちのよい木陰のイメージ。そんな素晴らしい演出に加えて、この店員の、おっとりとして、丁寧な接客。宇宙は意識的に、極力素直に納得して、差し出されたメニューを受け取る。しかし、目が合つて、いつものとろけるような笑顔に、少し驚いてしまった。先日、あんな意地悪をされたのに、気にしていないのだろうか。罪の意識に苛まれていた自分が馬鹿らしく思えてきて、また、胸の中に不機嫌の芽が出るのを感じる。

「また、後ほど参ります」

宇宙の隣の席で、女子大生らしい二人組が、小声で騒いでいる。ヤバい、ちょーカワイイ、そんな言葉が、相沢にも聞こえているはずだが、本人はどんな気分なんだろうか。勝手に感じている気まずさを紛らわすために、どうでもいいことを考えながらメニューを開いた宇宙は、それが見慣れたメニューに戻っていることに気付いて、複雑な気分になった。あのとき、素直に感想を述べていれば、ここにはあのケーキが載っていたかも知れないのに。

「いや、あれで良かったんだよ。アツサリ、成功してしまつたら、ダメな人間になつてしまうから」

自分の幼さを棚に上げて、そんなことを思つてみた。一度くらい挫折は、当たり前。努力と苦勞の末にこそ、成功がある。偉そうなセリフを並べてみても、特に大きな挫折を味わつたこともない宇

宙には、現実味もない。今日、ここに来たのは、相沢に謝る目的だったはずなのに、屈託なく向けられる彼の笑顔に、何だかまた腹が立ってきて、昼食を済ませるとすぐ、逃げるように店を出た。居心地が悪い。悪くしているのは、自分。解っているから、腹が立った。

「早く梅雨、明けないかな」

深夜の残業が常になってしまっている二人。悔しいが、他の同期たちよりも数倍要領が悪いらしい。そんな時間までは、さすがに誰も付き合ってはくれず、管理職以上にしか与えられない会社の鍵を、二人とも持っていた。それは平社員の間で最も不名誉なこととされ、一日も早く返却できるように頑張りなさい、と上司から言われてしまった。

「でもさ、この時間のほうが、捗るよね。邪魔な電話も鳴らないし、邪魔な上司も話しかけて来ないし、」

突然、美紀子が帰り支度を始めながら言った。

「え、もう帰るの？」

「うん。夜更かしはお肌に悪いから」

ウケ狙いにしても、疲れすぎていて、笑えない。化粧をしたまま寝て、最悪はそのまま入社するような女だ。しかし、冗談ではなかったように、

「相沢さん、女子よりもお肌が綺麗なんだもん。こっちがポロポロの顔してちゃ、話にならないわ」

そういうことか。相沢の肌など、ジツと見たことはないが、色白なのは確かだ。テーブルにグラスを置く手が、思い浮かんだ。憎らしいほどキレイな指に、清潔に切りそろえられた爪。宇宙が納得している、

「あれだけ通ってるのに、一回も、宇宙くんと会わないよね」

「……どれだけ通ってるんだよ？」

「ほぼ、毎週。もう、すっかり顔を覚えてくれたみたいだね、こな

いだカフェの外でバツタリ会った時も、挨拶してくれたんだよ」

「ふーん。良かったね」

「彼女いないみたいだし、そろそろ、仕掛けちゃおうかな」

また、獲物を狙うような目をする。か弱いバンビを狙う、豹のように見える。こういう面さえ見せなければ、美紀子はハッキリ言って、完璧だ。美人だし、スタイルもモデル並みで、胸はEカップだと自慢している。シャツのボタンが窮屈そうで、しかも、わざとなのか、いつもヒョウ柄や黒の下着をつけていて、それが透けて見えるのが気になって仕方なかった。休日に、どんな恰好であるのか、カフェに通っているのは知らないが、ほんの少しだけ、相沢が気の毒に思えてくる。狙われていることに気付かず、大胆に仕掛けられた罠に、アツサリ、引つかかってしまいそうだから。

「やめとけよ。あいつ、結構、根性悪いかも知れないぜ」

自分でも意外だったが、そう口にしていて、まさか自分が、相沢を庇うなんて。

「垂れ目でさ、気が弱そうに見えるけど、ああいうのに限って、遊び人なんだよ」

「相沢さんと親しく喋ったことないくせに、」

「……何で知ってるんだよ？」

「本人から、聞いたから。共通の知人の話題って盛り上がるからと思っただけ、宇宙くんのこと喋ったのに、」

役立たず、と、宇宙を責める。確かに、まだ宇宙と相沢との間には、見えないけれど分厚い壁があった。と言っても、それは一方的に宇宙が作り出している壁であって、宇宙がそうしようとさえ思えば、いつでも崩せる。しかし。

「何か、気に入らないんだよ。絶対友達には、なれないタイプだと思っただけ、」

不機嫌にそう言って、宇宙は再び仕事を始めた。

大好きなカフェ

結局、一人になって、全ての仕事が片付いたのは、完全に夜が明けた後だった。降りたブラインドの隙間から、久しぶりの太陽光が射し込んでいる。梅雨の晴れ間が、他の季節の何倍も嬉しく感じるのは、自分だけではないはずだ。宇宙はそんなことを思いながら、最後の提案書に自分の印鑑を押して、上司の机に載せた。今日は、水曜日で、会社は、休み。疲れているはずなのに、不思議と眠くなかった宇宙は、戸締まりをして会社を出ると、迷わず、あの店に向かった。夜は早く閉まるが、駅前ということもあり、朝早くから営業している。さすがに今はまだ準備中だろうが、常連のよしみで、珈琲くらいは淹れてくれるだろう。

電車を降りて、カフェが見えてくると同時に、相沢の姿も、見えた。ホウキとチリトリを手に、丁寧に、店の前の掃き掃除をしている。

『こんなに朝早くから、働いてるんだ』

腕時計を見ると、まだ六時前。徹夜明けで精神状態がおかしいからか、不思議といつももの憎らしさは沸いてこなかった。それどころか、せつかく集めたゴミをうまく袋に入れられず、また散らばってしまったのを見ていると、何だか気の毒になつてくる。……もしかして、不器用なのかな。何度も何度も同じ失敗を繰り返して、やっと、できるようになるタイプなのかな。その姿が、幼い頃の自分と重なって、手伝ってやりたい気持ちが芽生えたが、ぐっと堪えた。手を貸すことは簡単だけれど、それでは成功する時を遠ざけてしまう。ずっと逆上がりができなかった宇宙に、父親がいつも言った。宇宙はその時に父が感じたであろうもどかしさを思いながら、彼が掃除を終えるのを、見守った。

ようやく全てのゴミが片付き、相沢が店の中へ姿を消すと、宇宙は気まずさを今日だけは心のうんと深いところへ閉じ込めて、準備

中、のドアを開けた。

「……、」

相沢の、驚いた顔。まさかこんな時間に客が来るとは思ってもいなかったのだろう。しかも、ずっと愛想の悪かった客だ。マスターはまだ来ていないようで、必然的に、二人きり。

「まだ、準備中なのは、解ってるけど、……ちょっとだけ、ここに寄りたくなくて、」

宇宙は、せっかく閉じ込めたのに、簡単に出てこようとする気まぐさを、必死におさえながら、言った。すると、相沢は、ようやくいつものとろけるような笑顔を見せ、

「お席に、ご案内致します」

驚いたことに、案内されたのは、千賀がいた頃からよく選んでいた席だった。相沢が来てからは、いつも人が一杯で、仕方なく空いた席を使っていたから、彼は知らないはずなのに。不思議に思っている宇宙の前に、そつとウォーターグラスとメニューを置き、

「また、後ほど参ります」

そう言って、相沢は厨房へ戻って行った。時間外なのに、と、その丁寧な接客に感心しながら、一応メニューを開いた宇宙は、また、見たことのないケーキを見つけて、奥で作業を始めた相沢のほうに目をやった。

『……もしかして、負けず嫌いなのか？』

恐らく、いや、確実に、他のメニューには、このケーキは載っていないのだろう。半ば諦めの心境になってメニューを閉じたところへ、相沢が戻ってきた。

「あの、さ。また言いそびれるといけないから、先に言うけど、」
彼が床に膝をつく前に、宇宙は意を決して、そう前置きした。

「前に出してくれたケーキ、ホントはすごく、美味しかったよ。今までに食べたことないくらい、」

彼は、今日二度目の、驚いた顔をした。五回、瞬きをしたあと、ようやく事態が飲み込めたのか、今度は目に涙を浮かべながら、

「ありがとうございます！」

本当に嬉しそうな様子に、宇宙は、どうしてももっと早く言えなかったのかと、自分を責める。見ているともらい泣きしてしまいで、

「どうせ、今日もテストなんでしょ？早く持って来てよ、」

メニューを彼に突き返し、グラスの水を飲んだ。

目が覚めるほど美味しい新作のケーキを食べていると、まだ眠そうな顔をしたマスターが姿を現した。こんな早い時間に客が来ていることと、それが宇宙であること、おまけにケーキを食べていることに驚いて、目を丸くする。

「最近来てくれないから、寂しかったよ。千賀ちゃんのほうがよく寄ってくれてるぞ」

「え、」

「友達が綺羅のこと気に入っちゃって。一人じゃ行き辛いからって連れてこられてるみたいけど」

マスターの口振りだと、千賀は別に、相沢を気に入っているわけではなさそうだ。これ以上、彼を嫌いならなくて済んで、ホッとする。確かに、スイーツと同じで、こういう甘ったるいタイプは、好き嫌いが分かれるところだろう。

「……仕事が忙しくてさ。今日も、さっきまで会社にいたんだから、
」
それだけが理由ではなかったが、そう言い訳を試みる。

「なんだ、徹夜明けか。そんな大変な時に、寄ってくれるなんて、感動だな、綺羅？」

突然、話かけられた相沢は、驚いて作業をしていた手を止めた。

「ホラ、今日は俺がやるから、おまえはこっちで宇宙くんの相手をしてる」

仲良くなれるチャンスだぞ、と言いながら連れて来て、宇宙の向かい側に、座らせた。

「こいつ、こつちにまだ友達がないみたいでさ。仲良くしてやってくれよ、」

マスターはそう言って、さっさと奥へ引っ込んだ。

「……、」

仲良く、なるには、まだまだ、だと、思うんだけど……。予想外の展開に、宇宙は紅茶を掻き混ぜる手が止まってしまふ。マスターはきつと、宇宙が相沢を気に入っていないのを承知で、言っているのだ。相沢も、戸惑っているようだったが、接客をしなければ、と思っただのか、

「今日はこのあと、お休みですか？」

遠慮がちにそう尋ねられ、宇宙はただ、頷いた。

「いい天気で、良かったですね」

そのとろけるような微笑みが、造られたものではないと、ようやく気がつく。中性的な声は、ハツとするほど優しく、宇宙の耳に馴染んだ。初めて、ジツとその綺麗な顔を見て、彼を理解しようとして、努力してみる。それが恥ずかしかったのか、俯いてしまった相沢に、
「……いつ引越してきたの？」

今度は宇宙が、尋ねた。

「今年の三月です。二年前からずっと、このお店で働かせてもらいたくて。やっと、夢が叶いました」

聞くと、親戚の結婚式で偶然この街を訪れ、帰りの電車の時間待ちで寄ったのが、この店だったらしい。

「店員とお客さんの距離が、すごく近くて、楽しそうで、ケーキも紅茶も、すごく美味しかった。帰ってからも、ずっと忘れられなくて、」

その気持ちは、宇宙にもよく解る。初めて来たときのこと、思い出された。懐かしく思っていると、厨房から出てきたマスターが、「求人広告も出してないのに、ある日突然電話がかかってきて、働かせて下さい、って言うんだ。千賀ちゃんがいたし、断ったら、その人が辞めるまで待つから予約させて下さい、って……。バイトの

予約なんて聞いたことないだろ？二年も前だったから忘れてたんだけど、千賀ちゃんの就職が決まったって聞いたとき、急に思い出してさ」

メモした電話番号を、無くさなくて良かった、と言いながら、相沢の前に、クロワツサンとミルクを置く。

「どうせ、食べてないんだろ？今日は何時に来たんだ」

「四時くらいです」

「あんまり頑張りすぎるなよ？おまえの替わりは、いないんだから、」

その会話に、宇宙は驚いてしまった。自分も徹夜明けで大変には違いないが……。

「そんなに早くから来てるの？」

「はい、要領が、悪くて」

困ったように、笑う。宇宙が今食べているケーキを焼くため、だろうか。そしてあの日も。それを思うと、自分のしたことが本当に酷いことのように思える。

「……あの時はごめんね、ホントに、」

初めて謝ると、相沢は慌てて首を横に振り、

「謝らないで下さい、僕が勝手に、早起きしてるだけなんですから、」

「……、」

「それに、このお仕事、大好きなんです。ここにいられるだけで、幸せです」

そう言って、本当に幸せそうに微笑んだ。

彼のこと

設定温度が二十八度で、少々暑いフロアに、いつものように、美紀子と二人で残業中。美紀子は最近、長かった髪をバツサリと切つて、肩より少し上でカールさせている。失恋でもしたの、と尋ねると、今どき失恋で髪を切る女なんていないわよ、と馬鹿にされた。しかも、

「こないだ、相沢さんとデートしちゃった」

唐突に、そんなことを言つて宇宙を驚かせた。

「……マジで？」

「うん。一人暮らしで寂しい、つていうから、私が遊んであげる、つて言つたの」

引つ越してきて間もなく、友達もいないと言つていた。が、よりによつて、この女に引つかかるとは。宇宙は、赤ずきんに襲いかかるオオカミを想像しながら、美紀子の真つ赤な口紅に目をやる。

「あのキャラ、造つてるんだと思つてたけど、違つたみたい。店の外でも、ずつと敬語なのよ？年上だけど、全然そんな気がしないよね」

「え、年上？」

「……何よ、知らなかったの？一つ上だよ、」

年齢の話は出なかつたから仕方ないが、絶対に下だと思ひ込んでいた。彼は客の注文を聞く時、床に片膝をついて、相手の目をジツと見つめる。その様子が、主人の命令を待つ犬のようだからか、知らず知らずのうちに、自分のほうが立場も年齢も上だと、勘違いしてしまつていたのかも知れない。

「でも、今から二軒目だつていう時に、もう帰るつて言い出して。

まだ十二時だよ？他に、女でもいるのかな、」

腕組みをして、考えている。宇宙にはその理由が解つたが、敢えて口にはせず、

「いると思うよ。多分、年上でさ、あいつのこと、めっちゃくちゃかしてそう、」

また、口が勝手に、彼を庇っていた。弱い者いじめを見るのも嫌だった宇宙の記憶が、相手や内容に関わらず、無意識に被害者を助けようとしてしまうのだろうか。

「やっぱりそう思う？くっソー！奪ってやる！」

彼を魔の手から救おうと、機転を利かせたつもりが、逆効果だったようだ。美紀子はまた鋭い目つきをして、縄張りを誇示する獣のように、見えない敵を睨みつけた。

珍しく早く仕事を終えた宇宙は、久々に大貴を誘って、ファミリーレストランに来ていた。値段を気にせず、思い切り食べたい時は、こういう店が一番だ。

「それで、千賀ちゃんには会えたのか、」

二人を案内した無愛想なウェイトレスを見送りながら、大貴が言った。

「まだ。よく来てるみたいなんだけどな」

先日、マスターがそう言っていた。あれから、また残業続きで、あのカフェには行っていない。

「例の新入りとは、どうなの？和解した？」

「……解んない」

「解んないって何だよ？まだ謝ってなかったのか、」

「それは、謝ったよ、ちゃんと、」

それでいい、というように頷く生意気な大貴を睨んでいたが、

「あいつさ、一つ年上なんだって。ビックリじゃない？」

「へえ。けっこう下に見えたけど。童顔だからかな、」

大貴も意外そうに言った。無意識に見下していたかと心配していた宇宙は、ホッとしてメニューを開く。

「就職、しなかったのかな。最初から、」

マスターのように、途中で脱サラして飲食店を始めたという話は

よく聞くが……。

「そうなんじゃない？調理師学校とか行って、先輩の店で修行して、最終的には店を出すってヤツじゃないの？」

俺たちみたいに、サラリーマン希望じゃないヤツだっているよ、と大貴は笑う。宇宙だって、別に強く希望してサラリーマンになっただけではなかったが、敢えて反論はせず、再びメニューに目をやる。

「そんなに好きな仕事があるなんて、羨ましいよな」

先日の、相沢の幸せそうな顔を思い出した。店にいられるだけでいいなんて、そんな綺麗ごとのようなセリフも、彼が言うとな本当に綺麗で、また憎らしさが復活してしまっていた。容姿に恵まれた人間の気持ちなど、これっぽっちも解らないが、平凡な自分に比べたら、心の余裕が歴然としている気がする。完全に、勝手な宇宙の嫉妬だったが、あの日もまた、ケーキの感想を述べずに帰ってしまった。

「ホントに美味しいから、ムカつくんだよ」

つい口に出してしまって、それが何のことかを察した大貴に笑われる。相沢の、謙虚な態度からは想像もつかない、完成度。見た目にも個性的で、それが試作品だとは、言われなければ絶対に解らない。何処かのコンテストで賞を取ったと言われても、納得の味だった。

「なんでこんなに、あいつのこと嫌いなんだろう」

ずつと不思議だったことを、口にしていた。すると大貴は吹き出して、

「知るかよ、そんなこと。……でも、」

そこまで言っつて、先に運ばれてきたスープを一口飲んだ。

「似てるからじゃないの？」

顔じゃないよ、と言われなくても解っている言葉を付け足す。そんなことは百も承知だったが、口にされると腹が立つものだ。

「似てないよ、何処も」

宇宙はふて腐れて、そう言った。が、大貴は更に、意外なことを言う。

「見た目とかじゃなくてさ、心の中のことだよ」

見えない部分の実はすごく似ていて、それを無意識に感じ取っているのではないかというのだ。

「まだ知らないだけで、すごく似てる部分があるんだよ、きっと」

「……、でも、似てたら、普通、気が合うんじゃないのかな」

「そうだね」

当然だと言うような返事。嫌いだという話をしていたはずなのに、宇宙が怪訝な顔をして大貴を見ると、笑いを堪えているのが解る。

「……何だよ？」

「嫌い嫌いって言うのは、何の裏返しだか、知ってる？」

「……大貴！」

さすがに腹が立って咎めると、大貴は可笑しそうに、

「うちの姉貴の子供の性格がさ、姉貴にソックリなんだよ。自分のイヤなところが似てると、マジでムカつくって言った」

「……、」

素直じゃないところ、短気なところ、幼いところ、根気のないところ、平凡なところ、不器用なところ……。自分の嫌いなところを挙げればキリがない。それを今さら再確認して、傷ついた宇宙は、無愛想なウェイトレスが運んできたハンバーグを、黙って食べた。

美青年と、野獣

猛暑、という言葉聞き飽きてから、何年経つだろう。ようやく猛暑の折り返し地点を越えたと思えるのが九月だなんて、異常気象にも程がある。それでも、日に日に高くなっていく空を見ると、大好きな秋が近いことが感じられて、あと少しの辛抱だ、と、自分を励ましていた。

そんなある休日、例のカフェへ行くのにまだ少し、構えてしまう宇宙だったが、久しぶりに美味しいアイステイーを飲みたくなつて出掛けていった。すると、入り口で、客に向かって頭を下げる相沢の姿。どうやら、怒らせてしまったらしく、その男性客は怒りが治まらない表情のまま、駅のほうへと歩いて行つた。その後ろ姿に、まだ頭を下げている相沢に、声をかけようか迷っていると、中からマスターが顔を出した。

「ああ、宇宙くん、久しぶり、」

先に、宇宙に声をかけてくれた。

「何か、あつたの？」

少々遠慮がちに尋ねると、マスターは、どうって言うほどのことでもないよ、と、相沢の顔を覗き込む。

「気にすることないよ。誰だって、失敗することはあるさ」

「……でも、」

「ホラ、他のお客さんが待ってるから」

悲し気な顔をした相沢にそう言つて、中へ入ってしまった。後についていくか、ここで相沢を慰めるか、考えていると、

「……伝票を、他のお客さんのと間違えてしまって。珈琲一杯で二千円なんて、どう考えてもおかしいのに、ぼんやりしてて、気付かなかつたんです」

そう説明して溜め息をついた。大方、高いスーツの上に水でもひっくり返したんだろうと想像していた宇宙は、拍子抜けして、

「なんだ、それだけか。それなのに、あんなに怒るほうがおかしいよ。それくらいは失敗、俺だってよくあるし、」

見積書や提案書に、「様邸」というように客の名前を入れるのだが、何件も同時進行でやっているため、それらが入れ替わっているのに気付かず、営業担当に文句を言われることなど、日常茶飯事だった。

「次から、気をつければ良いじゃん。いちいち気にしてちゃ、やってられないよ。それより、あんたがそんな顔してるほうが、問題だと思っけど、」

相沢の、とろけるような笑顔を見るのが楽しみで通う客も多いのだから。それを指摘すると、相沢はハツとしたように、顔を上げた。また、宇宙の顔を、穴があくかと思うほど見つめていたが、

「ありがとうございます！」

ようやくいつもの笑顔に戻り、いらっしやいませ、と、店のドアを開けた。丁度空いていたお気に入りの席に、案内してくれる。宇宙はアイステイーを注文すると、久々に来た店の中の様子を、観察してみた。まずは、超常連で、マスターの釣り仲間が、カウンター席に二人。相変わらず、釣りの話で盛り上がっている。そして、これも常連の、近所の老夫婦と、大人しすぎて、そこにいるのかどうかも解らないチワワ。あとは明らかに、相沢目当ての、OL風の女子が三組。仕事を抜け出しているのか、それとも宇宙と同じように平日が休みなのかは解らないが、ファッション雑誌を見たり、ネイルを見せ合ったりして、いかにも女子というような会話が聞こえていた。他には、取引先に行く途中らしく、書類に目を通して営業マン風の男性二人と、最後に、自分。丁度数え終わった時に、相沢が紅茶を、運んできた。

「お待たせ致しました」

慣れた手つきでコースターを置き、その真ん中に、ロックアイスが入ったグラスを置く。

「アールグレイのアイステイーでございます」

優しい気な声でそう言って、最初の一杯分の紅茶を、グラスに注いだ。パチパチと音をたてて、まだ冷めきっていない紅茶が氷の角を落としてゆく。

「ごゆっくりどうぞ、」

軽く頭を下げて、戻って行く後ろ姿を眺めながら、当たり前のように置いていったミルクとシロップを、宇宙はたつぷりと、グラスの中へ入れた。

『きつと、真面目なんだな』

どんなことにも、真面目に取り組んで、失敗したら、真面目に、反省する。理想的だけれど、疲れそう。そう感じてしまう時点で、宇宙には真面目さが足りない。……似たところなんて、不器用なところくらいしか、見当たらないな。情けない気分にはなったが、どういうわけか今日は、今までのように、理不尽に彼を嫌いだという気持ちは沸いてこなかった。先日、大貴と心理分析めたことをしたからだろうか。しかも、

『宇宙さま。先ほどは、ありがとうございました。今日の紅茶のお代は、いりません』

伝票の端に、そんなメッセージを見つけて、宇宙は驚いた。レジにはマスターがいて、それを見せると、

「良かったじゃないか。給料日前なんだろ？」

そんなことを言ってからかう。それでも代金を払わずに店を出るのは何だか抵抗があつて、そう訴えると、

「人の好意は、ありがたく受け取るもんだよ。ホラ、後ろがつつかえてるから、さっさと出て、」

急かすように言つて、店のドアを指差す。宇宙は仕方なく、そのまま店を出た。

その日を境に、あのカフェで少し、変化があつた。それは……。

「ねえ、ちよつと聞いてよ！ 綺麗だったらね、」

相沢のことを名前で呼ぶようになった美紀子だが、いつもにも増

して、鼻息が荒い。

「客に渡す伝票に、いちいち、名前とメッセージを書いているのよ？
そんなの、馬鹿な女だったら、自分に気があるって勘違いするじゃない？」

そう言つて、ドスン、と音を立てて椅子に腰を下ろした。組んだ足元のピンヒールは、踏まれたら穴が開きそうな細さだ。

「気に入った女には、携帯番号書いてるんじゃないでしょうね」

「……そんなこと、しないタイプだと、思うけど、」

宇宙はできるだけ、美紀子を刺激しないように、穏やかな口調で言つてみる。想像するに、彼は伝票を他のテーブルのものと間違えるのを避けるために、そうすることを思い付いたのだろう。来店した客に名前を尋ね、それを席の番号と一緒に、伝票に書き込み、最後にレジで確認すれば、間違いは殆どなくなるはずだ。メッセージは単に、サービスなのだろうが。

「相変わらず、夜は早く帰りがるし。でも、二股とか平気である男なら、もうとつくに、Hくらいしてるはずなのよね……」

そんなことを恥ずかし気もなく呟いて、不機嫌に溜め息をつく。

「……店のお客に手を出すな、って、言われてるんじゃない？ マスターに、」

宇宙は思いつきでそう言ってみたが、

「ホストクラブじゃあるまいし。こっちが誘つてんだから、いいじゃないの」

余計に不機嫌になつてしまつて、今度は宇宙が、溜め息をついた。パソコンに向かつて作業を始めた美紀子の姿を眺めながら、どう考えても相性が良さそうには思えない二人を、想像してみる。相沢は、羨ましくなるほどの美形だけれど、多分、本人に自覚はない。最初は演技だと思つていたが、おっとりとした性格や口調は生まれつきらしく、何事にもひたむきで、真面目。それに比べて美紀子は、自他ともに認める美人だが、性格は強引で、豪快で、友達として付き合うなら楽しいけれど、恋人としては、ちよつと遠慮したい。恋

愛を、狩りのように楽しんでいて、手に入れられるまでが、勝負。落ちたと解った後は、興味がなくなるのだと言っていた。相沢の前では、全く別のキャラを演じているのかも知れないが、素の自分を見せられないのでは、長続きするはずがない。そう思ったが、口にする事などできるはずもなく、宇宙も黙って作業を続けた。

素敵な部屋

ようやく仕事に慣れてきて、深夜の残業に追い込まれる日も、少なくなってきた。朝早く来るか、夜遅くまでやるかの違いだけで、要領が悪いのは宇宙も相沢と同じだったようだ。彼と自分を比べると、明らかに努力が足りない気がして、焦りを感じてしまうが、今になって思うのは、自分にはないものを持っている妬ましさ、彼への敵意の原因の一つだったのかも知れない、ということだった。

電車を降り、いつものようにコンビニで夕食と雑誌を買って、アパートに向かって歩き出そうとした宇宙の目に、意外な人物の姿が映った。

「……、」

向こうも、驚いたように、宇宙のほうを見ている。

「この、近くなの？」

宇宙はそう尋ねてみた。

「はい、ちょっと遠いけど、すごく気に入った間取りだったので、まさか、相沢と、同じ駅を利用していたとは。今までに一度も会ったことがないのは、生活のパターンが全く違うからなのだろう。朝起きる時間が違うのは言うまでもないが、彼が仕事を終えて帰宅するこの時間、宇宙は大抵、会社にいたから。」

「……あの、もし良かったら、一緒にご飯、食べませんか？家に、練習で作ったケーキがあるんです。一人じゃ、食べきれないから、困ったように言われて、宇宙はすぐ、頷いた。放っておくと、飢えたハイエナに見つかって、ケーキもろとも、容赦なく食べられてしまいそうな気がしたから。」

思いがけず、相沢の部屋に案内された宇宙は、その近さにまた、驚いた。この辺りには大学もあって、アパートやマンションの数も多いのだが……。さらに、

「うわ、」

玄関を開けて、思わず、声を上げてしまった。その部屋の中が、まるでインテリア雑誌の写真のように、綺麗だったから。

「……すごいね、自分で考えたの？」

飾られた絵や、ポストカード、観葉植物、小物に至るまで、手を抜いていると思われるところは一つもない。毎日、インテリアに関わる仕事をしていると、知識はなくても自然と目が肥えて来るものだが、そんな宇宙の目にも、彼の部屋は完璧に映った。

「いつか、自分のお店が持てた時のために、普段から、いろいろ試してるんです」

キッチンで、作業をしながら、相沢が言った。

「子供の頃から、お気に入りのものを部屋に飾るのが大好きで。女の子みたいだって、よく言われてました」

相槌を打ちながら、今日ばかりは、彼の才能への嫉妬よりも、素直に感心する気持ちが勝って、宇宙はマジマジと、その部屋のレイアウトを眺めた。自分の部屋と、変わらない広さ。木目を活かしたナチュラルな家具は全て低く揃えてあって、飾られた雑貨が、引き立っている。ただ淡々と家具を並べるのではなく、そのそれぞれが生み出す僅かな空間にも、愛情を注いでいるのが感じられた。

「あ、お弁当、冷めちゃうから、先に食べててください」

放心状態に近かった宇宙に、相沢が声をかけた。

「……でも、……一緒に食べようよ、せっかくだから、」

すると、彼はいつものとろけるような笑顔になる。ところが、テーブルに向かい合って、食べようとした時、

「え、もしかして、ご飯ってケーキだけなの？」

「はい、」

どうしてそんなことを聞くのか、という表情。宇宙は呆れて、「そんなんじゃない、体壊しちゃうよ。……そうだ、この弁当、半分こしよう。そしたら、俺がその分、ケーキ食べればいいから、」

宇宙は無理矢理、彼の前からケーキを取り上げ、替わりに自分の買った弁当を半分、皿に取り分けてやった。

『美紀子は何やってんだよ?』

心の中で、呟く。やっぱり、あんなガサツな女に、相沢が捕まっ
てしまうのは可哀相だ。ハッキリとそう思った。

「優しいんですね、」

「……、」

「僕、嫌われてるんだと思ってました。……ごめんなさい」

宇宙は黙って、首を横に振る。嫌いだったのは事実だし、謝るの
なら、宇宙のほうだ。

「謝ることないよ、そう思われても仕方ない態度だっただろうし、
身に覚えがありすぎて、何だか恥ずかしくなってきた。ただ、千
賀が辞めて、替わりに入っただけなのに、八つ当たりされた相沢の
身になってみると、たまらない。」

「でも、解ります。すごく気に入ってた場所が、突然変わってしま
ったら、それは寂しいし、残念だから。……僕もお客さんに、そん
なふうにしてもらえないようにしたいな」

まだまだですけど、と謙遜する。きつと相沢は、自分の才能や魅
力に、全然気付いていない。宇宙からしてみれば、微笑むだけで相
手を幸せな気分にすることも、立派な才能だと思えた。誰にでも出
来ることではないし、自分にはないその才能が、羨ましい。目が合
うたびに、とろけるように微笑む彼の顔を見ながら、そんなことを
考えていた。

「いつも、この時間に帰って来るの?」

初めて一緒に食事を終え、おいしいケーキも食べたところで、よ
うやく打ち解けてきた雰囲気になんか安心した宇宙は、そう尋ねた。

「はい。ホントは、こんなに早いんだったら、自炊しなきゃいけな
いんですけど、もう、クタクタで、」

カフェでの仕事は、たった数時間、手伝っただけだったが、決し
て楽な仕事ではない。ずっと立ちっ放しで、おまけに、客相手に疲
れた顔など、見せられないから。

「大変だね、」

それ以上、言葉が見つからず、宇宙はケーキのお礼を言って、帰ろうとした。美紀子に呼び出される前に、少しでも休ませてやりたいと思ったのだ。

「あの、」

玄関で、靴を履きかけていた宇宙に、相沢が、躊躇いがちに声をかける。

「こないだ、宇宙さんのおかげで、すごく良いこと、思い付いたんです。ずっとそのお礼が言いたくて、」

宇宙はそれが何のことなのか、少し考え、美紀子から聞いた伝票の話を、思い出した。一つの失敗から、新しいアイデアを思い付くそれは簡単なようで、難しいのに。

「俺は何にも、してないじゃん。それに、紅茶だって、タダにくれたし。お礼を言うのは、こっちだよ」

すると相沢は首を横に振り、

「宇宙さんの、おかげなんです。あのとき、来てくれたのが宇宙さんじゃなかったら、思い付かなかったから」

他の常連さんだったら、伝票に書くのではなく、直接、伝えていたから。真剣に言われて、宇宙は苦笑した。嫌われていると思っていて、声をかけ辛くて、伝票に書いたのだと。

「……じゃあ、お礼はいいから、一つ、お願いがあるんだけど、」
宇宙はふと思いついて、そう口にした。

「宇宙さん、って呼ぶの、やめてほしいな。そっちのほうで、年上なんだし、」

自分が偉そうにしているようで、気がひける。敬語を使われることも、何だか落ち着かなかった。

「……はい、気をつけます」

また敬語で言ってしまったことに気付いて、困ったように笑う。すぐに身に付かないタイプなのは間違いなさそうで、今度こそ帰ろうとした宇宙に、

「今日はありがとうございました。また、来てくださいね、お店にも、家にも、」

とろけるような笑顔で言われて、宇宙も思わず、つられて笑う。

「近いんだし、ケーキが余ったらいつでも、言つてよ」

彼の作るケーキは、間違いなく、今まで食べたどんなケーキよりも、美味しかった。将来、彼が有名なパティシエになったとき、初めて彼の作品を食べた人、として紹介されるかも知れない。インタビューで何て答えようかな。そんなことを思いながら、本当に目と鼻の先の、自分のアパートに戻った。

彼の気持ちは

ようやく居心地の良さを取り戻したカフェで、久々に大貴と過ごしている。昼前というのは、主婦は何かと忙しく、OLは仕事中、学生はまだ学校で、店の混雑は全くない。台風も季節も過ぎ、気持ちの良い秋晴れが続いている外を眺めながら、宇宙はいつものように、朝食兼昼食をとっていた。店の中は、マスターが車を買って替えるという、羨ましい限りの話題で持ち切りで、丁度ディーラーに勤めている大貴が、サンドイッチ片手に、その相談に乗っている最中。「低いランクで装備を豪華にするか、ランクを上げて標準装備にするか、迷うところだよな」

贅沢な悩みだな、と、他の常連客に言われながら、マスターは大貴が持つて来たパンフレットを眺めている。

「ホントだよ。俺なんて、まだペーパードライバーなのに。学生時代に中古でも買って、乗っておけば良かった」

宇宙は、到底手が出ないと解っている車のパンフレットを閉じ、溜め息をついた。手の届かないものに興味のない宇宙には、外車なんて架空の乗り物にしか見えない。それに、特に車が必要な状況ではないし、置く場所もなかった。駐車場を借りるには、更に月々の出費が嵩むことも解っている。今の自分の給料では、大学時代から住んでいるアパートの家賃を払うのが精一杯だった。

「お水を、お取り替え致します」

会話の邪魔をしないように、控えめな声で言って、相沢がウォーターグラスを新しいものと交換していった。冷えすぎた水は体に悪いため、この店では最小限の氷しか入れない。そのため、冷めてしまつのも早いのだが、客が感じる前に、取り替えてくれるのだ。こういう気遣いに、いつも感心させられる。しかも、氷が星の形をしていて、融けていくのを見ているだけで、心が和む。

「そつえば、宇宙くんはもうすぐ誕生日じゃないのか」

パンフレットから顔を上げ、思い出したように、マスターが言った。このカフェでは、常連客の誕生日を祝ってくれる。ケーキをデコレーションしてくれたり、ドリンクをサービスしてくれたりという形が多いが、去年は、就職が決まったお祝いも兼ねてと、スーツ用のソックスとハンカチを、プレゼントしてくれた。

「やっぱり実用的なものが嬉しいだろ？今年は何がいい？」

実用的なもので、欲しいものと言えば……、咄嗟に思い付かず、

「車」

「馬鹿」

「客に馬鹿とはどういうことだよ？」

そんな他愛のない会話をしていると、日頃のストレスを忘れられる。真剣に商談に入った大貴とマスターを横目に、宇宙は立ち上がって、作り付けの棚に並んだ、小物を眺めた。季節やイベントごとに、ディスプレイを変えていて、いつ来ても楽しい。特にインテリアの勉強もしていないというマスターのセンスは素晴らしく、しょっちゅう、地元の雑誌やインテリア関係の雑誌の取材だと言って、カメラマンが内装の写真を撮っていた。

「才能の配分が、不公平なんだよな」

思わず呟いた宇宙だったが、マスターといい、相沢といい、この店には二人も複数の才能の持ち主がいる。それにひきかえ、自分には、これと言って履歴書に書ける資格もなければ、突出したスキルもない。それは確実に自分の怠慢のせいなのだが、こういうときは神様を責めておけば、気が楽だ。

商談は、まだもう少し迷うというマスターの言葉で、一旦終わったらしく、大貴は簡単な手書きの見積を渡し、宇宙のところへやってきた。

「お待たせ。さあ、帰るか」

この時間を過ぎると、近く的女子大生がどつと押し寄せてくる。二人とも、決して若い女子が嫌いなわけではないが、あの雑多に入り交じった香水の匂いだけは、どうも苦手だ。宇宙はテーブルの上

の伝票を手に取って、そこにちゃんと、「宇宙さま、大貴さま 良
い休日を」と、メッセージが書かれているのを確認して、レジへと
持っていく。

「綺羅が世話になってることだし、プレゼント、期待しててよ」

帰り際、マスターが言った。

「え、ホントに車、買ってくれるの？」

冗談だと解っていて、そう返すと、

「馬鹿、」

近いうちに、またおいで、と、笑って手を振った。

「最近、千賀ちゃん、千賀ちゃん、って、言わなくなったじゃん」
駅に向かって歩きながら、大貴がからかうように言った。宇宙は、
言われて初めて、そうだと気付く。気まぐれに来るかも知れない千
賀を目当てに店に行っていたのは、最初のうちだけで、今はもう、
そんな気持ちは何処にもなかった。あんなに宇宙の心を占めていた
彼女への気持ちが、いつの間にか、忽然と姿を消してしまっている
なんて。

「会社に、可愛い子でもいるのか、」

「いないよ、そんなの」

そう言ってから、ふと美紀子の獣のような目つきを思い出して、

「……強烈なのが、一人いるけどさ、」

大貴なら、彼女と相性がいいかも知れない。そう思った宇宙は、
更にこう言った。

「強烈な美人で、肉食系。大貴、彼女いないんだったら、紹介する
よ」

大貴は驚いたように宇宙を見つめている。が、探るような目にな
り、

「そんなおいしい話、何か怪しいんだけど」

「怪しくなんかなくて。俺の同期の子だよ。マジで美人だし、E
カップだって言ってた」

すると、ますます怪しい、と言い出した。

「大体、そんないい女が、フリーなわけないだろ？」

尤もだ。宇宙自身も、そう思う。

「もし、ホントに美人で巨乳でフリーの子がいるなら、それは、性格に問題があるってことだよ」

「……当たり前。すごいね、大貴」

宇宙の答えに、今度は呆れたような顔をする。

「そんな女を俺に勧めてどうするつもりだよ？」

「気の強い女が好きだって言ってたから、」

それは、嘘ではない。が、本当の理由でもない。宇宙は、しばらく考えて、

「その子がさ、最近、すつごく気に入って狙ってる男がいるんだけど、……そいつは、どう見ても、気が弱そうで、例えば、仕事で疲れ切っても、強引に誘われたら断れなくて、振り回されてる感じなんだ。……気の毒だから、波風立てずに引き離す方法はないかなって、思ったんだけどさ」

正直に、そう話した。怒るかな、と思ったのに、
「なるほど？」

面白そうに笑いながら、宇宙の顔を、覗き込んだ。

「ホント、解りやすいヤツだな、宇宙は」

「どういう意味？」

「だから、たとえ話が、下手だって言ってるの。その気の弱そうな相手って、綺羅のことだろ？」

「……、」

どうして解ったのか、見当もつかない。ただジッと大貴の目を見ていると、

「そっか、ようやく和解したのか。良かったじゃん」

これでやっと、宇宙の機嫌をとらなくて済むよ、と、ホッとしようと言っ。

「でも、案外、綺羅みたいな大人しいヤツって、強引な女が好きだ

「つたりするんじゃないの？もうちょっと、様子見たら？」

「……、」

黙ったままの宇宙に、いつでも協力するよ、と言って、大貴は先にホームに入ってきた電車に乗り込んだ。今からマスターの車の正式な見積を、休日出勤して作るらしい。大貴を乗せて走り出した電車を眺めていた宇宙だったが、

「そうなのかな、」

一人になって、考えてみる。

『余計なおせっかいなら、しないほうがいいよね』

確かに、自分にもないものを求めると言うなら、相沢には美紀子が合っているのかも知れない。それにしても、極端すぎる気がしたが、大貴の言うように、もう少し、様子を見てみることにしよう。そう決めて、ようやく到着した電車に乗り込んだ。

毎年、思うことだが、誕生日には何か、思わぬ落とし穴がある。

子供の頃は、多分はしゃぎすぎたせいだろうが、熱を出して寝込んでしまったり、高校生の頃には、ちょうど誕生日に日付が変わる頃、当時付き合っていた子に別れようと言われたり、二年前は、忘れもしない、千賀と元カノを比べてしまって、大喧嘩になった。……今年は何だろう。去年は就職活動を頑張ったご褒美なのか、特に何も起こらなかったが……。残業中、つい、そんな後ろ向きなことを考えてしまって、溜め息が出た。自分には、向上心というものが無い。それをハッキリと自覚できるのもどうかと思ったが、ただ、ダラダラと現状維持ができていれば、それで満足。だから当然、今以上に、以下にも、ならないのだろう。

『向上心か……』

真っ先に浮かぶのは、やはり相沢の姿だった。彼は本当に、偉いと思う。自分の夢を実現するために、毎日、どんな些細なことにも、一生懸命に取り組んでいる。そして、自分が選んだ仕事を、大好き

だと言えること。彼は簡単に口にしたが、それは宇宙にとって、途方もなく難しいことに思えた。自分が何をやりたいのか。何ができるのか。考えれば考えるほど、傷ついてしまう。結局サラリーマンになったということは、その質問に、即答できないからかも知れないと、今更ながら、気付いていた。

「最近、どうなの？」

珍しく、黙って仕事をしている美紀子に、そう尋ねてみる。

「どうって、何が？」

不機嫌なのは、相変わらずのようだ。パソコンが古い上に、CADの容量が大きくて、時々、フリーズする。そういう時に限って、図面を保存していないものだが、今、まさにその状況のようで、

「あー、もう！なんでこんな古いパソコン使わなきゃならないのよ？」

美紀子は苛立つて立ち上がり、鼻息も荒く、リフレッシュルームと呼ばれる部屋へ入っていく。そこは唯一、喫煙できる場所で、上司の前では隠しているが、定時後に人がいなくなると、美紀子はそこで煙草を吸うのだ。余計なとばかりを受けたくはなかったが、喉が渴いていた宇宙もその部屋に入って、自販機で紙コップのコーラを買い、美紀子の向かい側に座った。

「……私って、魅力ない？」

唐突に聞かれて、宇宙は言葉に詰まった。

「煙草をやめればいいの？それとも、何？」

そんなことを口にする理由に、心当たりがないわけではない。しかし、黙っていると、

「おかしなのは、あつちなのかな。もう三ヶ月も経つのに、何にもナシなんて、おかしくない？」

意見を求められているのが解った宇宙は、仕方なく、口を開いた。

「……付き合って、って、言ったの？」

「そんなの、言わなくなつて解るでしょ？子供じゃあるまいし」

やっぱり、ますます不機嫌になっていく。しかし、宇宙は、

「言わなきゃ、解んない人だっているよ。きっとあいつは、美紀子のこと、まだ友達だと思ってるんだよ」

「キスしたんだけど？」

「……、」

パチパチと、炭酸が弾ける音がして、紙コップに添えた手に、微かな飛沫の冷たさを感じる。宇宙が黙っているうちに、今日こそハッキリさせてやる、と言いながら、美紀子はフリーズしたままのパソコンを放って帰って行った。その後ろ姿を見送ったあと、宇宙は意外な気持ちで、コーラを飲み干す。……: どういう状況で、どっちから、だったのかは解らないが、キスをしたというのなら、ただの友達ではない。

『もしかして、本気で好きなのかな』

相沢が、もし、本気で美紀子を好きなのだとしたら……。美紀子も本気なら、それでいいのだ。しかし、まだそのようには到底見えなくて、もどかしい気持ちになる。

『美紀子に、あの店を、教えたのがいけなかったんだ』

ただの狩りなら、他の場所ですらしてほしい。宇宙にとって、何よりも大切なあの場所を荒らされるのだけは、我慢できなかった。

プレゼント

珍しく、仕事を早くに終わらせた宇宙は、再び大貴と、カフェに来ていた。大貴はマスターと商談の続き。宇宙は、カウンターの上に置いてあった、知恵の輪を外そうと、さっきから頭を悩ませている。子供の頃から、苦手だったが、大人になったからと言って、出来るようになるものではないようだ。

『こういうのは、とんでもないところから、外れるもんなんだよ』
解ってはいるが、なかなか外せない。単純な形なのに、と苛立つてガチャガチャやっていたら、

「あ、」

その様子を、ずっと見ていたららしい相沢が、声を上げた。

「すごい、……それ、どうやっても無理だったのに」

「俺も、今、ビックリした」

「やっぱり、すごいですね、宇宙さんは」

相変わらず、敬語で、呼び方も治っていない。宇宙が指摘すると、

「すみません、……」

「別に、謝ることも、ないけどさ」

もうすぐ閉店のため、他に客もなく、翌日の準備も終わらせたように、相沢はカウンターの、宇宙の隣の席に腰を下ろした。外れた知恵の輪を、元に戻そうとしているようだが、そのやり方が、解らない。

「……こういうの、全然ダメなんです」

頭が悪くて、と、困ったように宇宙の目を見る。どうやら、教えてくれと言っているようだった。自分もずっと苦手だったが、相沢よりはマシな気がしてきて、初めて少しだけ、優越感を覚える。宇宙は彼の手から知恵の輪を取り上げ、元通りにして見せた。

「まあ、もう一回外せて言われても、無理なだけだね、」

感心して目を丸くしている相沢に、正直に、そう言ってみた。こ

んなふうには、向かい合って、笑顔で話をするなんて、少し前までは想像もつかなかったことだ。そのことに気付いて、しかも、何だか距離が近すぎるような気もして、動揺を隠すために、もう一度、知恵の輪を手取る。すると、

「そうだ、今日は、宇宙さんに、プレゼントがあるんです」

突然、相沢がそう言って、席を立った。ホツとした宇宙は、その後ろ姿を目で追いながら、軽く息を吐く。相沢は、奥から綺麗にラッピングされた二つの箱を、持って来た。

「これ、マスターと僕から。どっちがマスターからか、すぐに解ると思いますよ」

可笑しそうに言って、それを差し出す。中身を想像していると、
「お待たせ。やっと、決めてくれたよ」

大貴が体を伸ばしながら、宇宙の隣へやってきた。マスターも来て、

「ああ、疲れた。真剣に考えると、疲れるよ」

結局、最後は色で悩んでいたらしく、ようやくそれも決まって、商談成立、らしい。

「マスター、宇宙さんが、これ、外したんです」

相沢が言うと、ホントか？ と、疑わし気に宇宙を見る。

「ホントです！ あつという間に外しちゃって、ビックリしました」

それは少々大袈裟な気もしたが、敢えて否定せずにいると、

「へえ。鈍臭そうに見えるけど、器用なんだな」

そんな失礼なことをサラツと言って、店を閉め始める。まだ客がいるのに、と、マスターの背中を睨みながら、テーブルの伝票を見ると、

『宇宙さま、お誕生日、おめでとうございます。大貴さま、マスターの車は、決まりましたか？』

そんなメッセージが書かれていた。何だか、温かい気持ちになって、ふと笑みを零す。帰り際、支払いをするまでの僅かな時間だけ、彼があまり上手とは言えない字で書いた言葉を目にして、癒

される客も、多いはずだ。

「宇宙くんのプレゼント、奮発したんだぞ？」

マスターが言うと、側で聞いていた相沢が可笑しそうに笑う。

「有り難く思つて、大事にしてくれよ」

さも凄いものが入っているかのようだ。気になったのか、店を出るなり、大貴が、

「何もらったの？」

「解んない。……でも、マスターからののは、どうせくだらないものだよ」

帰宅した宇宙は、おもむろにその二つの包みを開けてみた。バニラの甘い香りがする、マドレーヌと、ブリキの、車。宇宙は可笑しくなつて、吹き出した。車には、違いないけれど。

「しかもこれ、店にずっと飾つてあつたヤツじゃん」

季節が変わつて、模様替えがされても、いつも何処かに飾つてあつた、ブリキの車。マスターが買った新車の、何十年も前の、形。宇宙はその箱の中に折り畳んで入れてあつた、メモを取り出した。

『お誕生日、おめでとございます。また、寄つてくださいね。L

a chaise du poste』

普段、店員が電話に出る時などは、『La ^ラ chaise ^{シエズ}』と略

していたが、その先が、あつたのだ。駅前のカフェ、で誰にでも通じるため、店の名前をハッキリと見たことがなかった。何語なのか、何という意味なのか、考えても解らなくて、常連がこんなことでは店に失礼だと思つた宇宙は、その店のメモに印刷されている番号に、電話をかけてみる。電話を取つたのは相沢で、宇宙からの質問に驚いたようだったが、

「La chaise du poste (ラ シエズ デュ ポスト)、フランス語で、駅の椅子、という意味です。気楽に休憩して欲しい、つていう思いで、この名前をつけたそうですよ」

その答えに、宇宙はただ、ありがとう、と言つて、電話を切つた。フランス語など学んだことはなかったが、彼の発音が、取つて付け

たものでないことくらいは、解る。彼の新たな才能を見つけてしま
つて、また、複雑な気分になったが、確実に、今までのそれとは、
違っていた。しかし、本人はまだ気付かず、もらったマドレーヌを
食べながら、仏頂面をしていた。

コンプレックス

冬の気配が、あちこちに感じられるようになってきた。落葉樹の葉っぱが風に舞うのを見てみると、わけもなく寂しい気分になる。夕暮れが早く、急ぐように沈んでしまふ太陽に焦燥感を煽られ、美紀子が帰って一人になった宇宙は、大きく溜め息をついた。フロアの北と南にある窓のブラインドを下ろし、リフレッシュルームで、ホットココアを飲みながら、しばし、ポーツとする。もともと、機敏なタイプではないし、競争心も欠けていて、常にトップでなければ気が済まない、などと思ったこともない。しかし、こうも明らかに差がついてしまったのを感じると、さすがの宇宙も、何とかしなければ、と思い始めていた。美紀子の帰りが遅いのは、フレックス制で、出社が遅いから、当たり前。宇宙は、この会社がフレックスタイムを採用していることを評価して採用試験を受けた一人だが、実際、それを利用している社員は、意外に少ない。宇宙自身もそうだが、少しでも早く帰りたいため、朝は普通に、九時出社だった。宇宙は机の上の、ブリキの車を手に取り、小さなタイヤを指でクルクル回してみる。仕事に追われている時、少しでも癒されるかと思つて、自分の部屋ではなく、会社に持つて来ているのだ。

「マスターの車、もう来たのかな」

誰もいないのをいいことに、声に出して呟いた。最近、忙しくてあの店に顔を出していない。大貴にも、会っていないかった。完全に集中力の途切れた宇宙は、携帯を取り出し、大貴に、電話をかけてみる。仕事にかけたことは一度もなく、自分でも珍しいことをしているのは解っていたが、

「何だよ？ 何かあったのか？」

会社からかけていると解ると、大貴は真剣に、心配してくれているような声で尋ねた。

「……別に、ないけど。何してるのかな、と思つて、」

それを聞いた大貴は、仕事だよ、と笑いながらも、何かあったんだろ、と、妙に優しい。

「ホントに、何も無いよ。ちょっと、休憩してて、思い付いたから」「ならいいけどさ。そういえば、こないだ駅前のカフェに行ったら、千賀ちゃんが来てたぜ」

「え、ホント？」

「千賀ちゃんと一緒に来てた子が、綺羅に告白してた。何か、お似合いだったな。二人とも、おっとりした感じで、」

「……、」

「あ、電話かかってきた。ごめん、また連絡する、」

そう言っただけで電話は切れ、宇宙は再び、溜め息。何だか余計に、集中力がなくなつた。さっき途中まで決めた、部屋のコーディネートが、急につまらないものに見えてきて、思い切って最初からやり直すことにしたが、

「……あれ、この人、どんな部屋にしたいんだっけ」

頭の中がグチャグチャで、何もまとまらない。疲れているには違いないけれど、原因はもっと、他のところにある気がした。この情けない状態を回復するにはどうすればいいのか。考えても解らず、宇宙はまた、分厚いカーテンのカタログを、最初から捲った。

結局、休日出勤をすることに決めた宇宙は、九時過ぎに会社の戸締まりをして、外に出た。ドアノブの静電気に弾かれた指が痛くて、明日から用心しようかと心に決める。スーツだけではもう寒く感じたが、辺りにはまだ、コートを着た人など一人もいなかった。この、過剰に感じる寒さのわけは、寂しさ？そんな、何処かで聞いた詩のような気持ちになるとは夢にも思わなかった宇宙は、その寒さを追いついて、わざと早足で歩いた。

満員電車をやっこのことで降り、改札への階段を上がっていくと、そこに相沢の姿があった。お互い、気付いて、隣り合った改札を抜け、再び、顔を見合わせる。

「お久しぶりです」

変わらぬ笑顔に、ホツとした。何故か涙が出そうになり、慌てて俯くと、

「何か、あつたんですか？」

真剣な表情で、宇宙を見つめる。大貴にも聞かれたが、本当に、何があつたわけでもなかった。相沢は、そんな宇宙に氣遣うような眼差しを向けていたが、思い付いたように、

「ご飯、まだですよ？ 一緒に、食べませんか？」

「……、」

「シチューを、作つたんです。丁度二人分、残ってるから」

頑張つて、自炊を始めたのだと言う。これ以上、頑張らなくてもいいのに、と思いつながら、宇宙は誘われるままに、相沢の部屋へと向かった。

二度目の、この部屋。相変わらず綺麗にされていて、すぐにでもくつろぎたい気分させられる。散らかった部屋が精神上よくない、と研修で教わつたわけが納得できた。

「お酒、飲みますか？ ブランデーかワインなら、ありますよ？」

そう勧められ、宇宙は迷わず頷いた。こういう気分時は、アルコールに頼るのが一番いいのかも知れない、と思つたから。そんな宇宙の気持ちに氣付いているのかも知れない相沢は、専ら料理に使うだけで、殆ど飲んだことがないと笑う。

「じゃあ、飲んでみたら？ 意外と強かつたりして、」

宇宙は、一人で飲むのも氣が引いたので、グラスを二つ並べて、白ワインを注いだ。キッチンからは、シチューの良い匂いがしてきて、それだけで、何だか温かい気分になる。いつもなら、一人で夕飯を食べることを寂しいと思つたこともなかったが、今日は、一人でないことが、心底嬉しかった。

「いただきます」

二人して手を合わせて、食事を始めた途端、相沢の携帯が鳴つた。すみません、と謝つて、その電話に出る。

「今、お客さんが来てるんだ。だから、ごめんね？ また今度」

その口調に、宇宙はマジマジと、相沢の顔を見た。

「すみませんでした、食事中に」

「普通に、喋れるんじゃない」

頑に、自分に対して敬語を貫くことに、何の意味があるのかと不思議に思えてくる。しかし、それよりも、

「……今の、彼女？」

相沢は、一瞬迷って、頷く。

「千賀ちゃんの、友達でしょ」

すると、驚いたように、

「どうして知ってるんですか？」

「内緒」

宇宙はそう言って、再び食事を始める。手抜きだと言ったが、とてもそうは思えないほど、おいしいシチューだ。しかし、何だか、穏やかになれない。黙ってしまった宇宙に、相沢は、

「やっぱり、美味しくないですか？」

不安げな眼差しを向ける。宇宙はハツとして、首を横に振った。

「美味しいよ、すごく。……ちょっと、考え事、してみたみたい」

自分でも、サッパリ、解らない。何に、気を取られているのか。

何が、こんなにも心を乱すのか。宇宙は苛立って、グラスのワインを、一気に飲み干した。

「……お仕事、大変なんですよ。きつと、すごく難しいことを考えなきゃいけないから、疲れてるんですよ」

そう言って、ワインを空のグラスに注ぐ。彼の穏やかな表情と口調は、波立った宇宙の心の中を、スツと鎮める力を持っていた。が、今度は逆の方向に、微かな振動を残す。それは宇宙の中に、今まで感じたことのない気持ち呼んだ。それとも、長年、忘れていただけだろうか。温かくて、心地良い、光。ようやく、平常心を取り戻した宇宙は、

「そんなことないよ。集中すれば、きつとすぐに終わる仕事なのに」

さ、ダラダラ、やってるだけだよ」

自嘲するように言った。これ以上、傷つきたくなくて、その話題を、相沢に、返してみる。

「調理師免許って、どうやって取るの？」

「僕は、二年間働いた経験と、試験を受けて、取りました。でも、調理師学校に通って、ちゃんと卒業すれば、それでも、免許がもらえますよ、」

学費が高くて、学校に行けなかったため、自分で参考書を買って勉強したのだと言う。料理は、知人の店で働きながら教わり、身につけたようだった。

「でも、僕が本当にやりたいことは、パティシエの仕事だったんです。それに気がついて、今度は、お菓子作りの勉強を、始めました」
三年働いて貯めたお金でパリに行き、住み込みで修行をした。流暢なフランス語のわけは、それだったのだ。

「頭が悪いから、大事なことに気付くのも遅いけど、でも、調理師免許は、取って良かったと思います。だって、あのお店で、雇ってもらえたから」

履歴書に、書ける資格。普通免許だけなんて、今どき、いない。しかも、ペーパードライバーだ。

「俺も何か一つくらい、資格が欲しいよ。転職するにしても、今のままじゃ、何処にも行けないから」
すると、相沢は、驚いたような顔をして、

「宇宙さんは、すごく頭が良いんだから、何でもできますよ？」
「良くないよ。ただ、大卒っていうだけで、特に知識があるわけでもないし」

口にすればするほど、情けなくなってくる。それに引き換え、相沢は、将来に繋がるように、着実に駒を進めてきているように思えた。右往左往したって、遠回りしたって、辿り着く先が見えているなら、それで構わない。まっすぐ進んでいるだけで、先に何も見えない宇宙には、何もかもが、羨ましく映っていた。

「宇宙さん、間違ってます」

珍しく、強い口調に、宇宙は驚いて彼の顔を見た。

「大学に行きたくて、勉強したって、行けない人もいるんです。僕なんて、高校だって、行ってないのに。……誰でも解る問題が、解けない人も、いるんです。僕から見たら、大学を卒業してるなんて、ホントにすごいことなんです」

宇宙は何も言えず、ただ相沢の目を見つめていた。

「やっぱり、お酒は、向いてないみたいです」

帰り際、相沢は宇宙に、何度も謝った。

「お酒を飲むと、いつも、失敗ばかりで。ホントに、すみませんでした」

相沢を責める理由など、何処にもない。気にしてないから、と、彼の部屋を後にしたが、帰宅して、ベッドに仰向けになった宇宙は、泣きたい気分で頭から毛布を被った。かと言って、泣けるほど子供でもなく、ただジツと、布団の中で丸くなる。相沢が、宇宙にずっと敬語で話す理由、それは、宇宙を、本当に尊敬していたから。そんなことを真顔で言われて、嬉しいという気持ちはこれっぽっちも、沸いてこなかった。それどころか、恥ずかしくなってくる。人の能力を測る物差しは、いろいろあるだろうが、どんな物差しで測ったって、相沢には勝てる気がしない。彼の中で、勉強ができなかったコンプレックスが、宇宙を美化しているだけで、実際社会に出て役に立つスキルを多く持っているのは、確実に彼のほうだ。そして宇宙は、いつも前を向いて、真っ直ぐ自分の夢を見つめている相沢と、ただ目の前の仕事に追われて日々を過ごしている自分を無意識に比べるようになって、焦っていたのだ。

『学歴なんて、何の意味もないんだな』

ようやく、その結論に達して、宇宙は目を閉じる。ペーパードライバーと同じで、役に立っていないければ、何の意味もない。将来のことを深く考えずにここまで来てしまった結果が、今の自分なのだ。

ハッキリと見えていたレールは、大学という無意味な終点まで。そこから先の道は、誰も、教えてはくれない。

夢とか目標とか、そんなものを持つているのは、限られた人間だけ、そう思っていた。しかし、それがなければ、何のために生きているのだろう。ただ、何となく入った会社の、歯車の一つでありつづけるため？ そうやって、いつか尽きると解っている命の火が消えるのを、待つだけ？

答えはまだ、見つからなかった。しかし、見つけなければならぬ。自分より優れた人間に、尊敬していると言われて、恥ずかしくないようにならなければ。追い越すことは無理でも、せめて、追いつきたい。宇宙は、自分の中に初めて芽生えた向上心に、驚いていた。それが確実に相沢の影響だということも、ハッキリと、解っていた。

彼の評価

会社が入っているビルの地下には、一般の人も多く利用する、レストラン街がある。和食からイタリアン、中華、ファストフードまで、様々な店が並ぶが、平日の昼時は、オフィスで働く社員たちでどの店も一杯になり、まるで社員食堂のような混雑だ。そんな中で空いた席を見つけるのは至難の業で、テイクアウトにしようか迷っていた宇宙の目に、意外な光景が飛び込んできた。窓際の席で、相沢と、制服を着た女性が食事をしている。今日は月曜日で、例のカフェは定休日。相手は恐らく、相沢の彼女なのだろうか……。

「あ、宇宙くん、席、何処か空いてる？」

美紀子の声に、心臓が止まりそうになった。

「何よ、そんなにビックリして」

怪訝そうに、宇宙の顔を見る。最近、美紀子が相沢のことを口にするとはなくなっていたが、どうなったのか、聞くのも恐ろしいと思っていたところだ。

「……空いてないみたい。他の店、行く？」

やっとのことでそう言っ、美紀子を外に連れ出した。

「ちょっと、どうしたの？ あの店にいたら、何かマズいことでもあるわけ？」

結局、何処も一杯なのは同じで、二人は比較的人の少ない、和食の店の列に並んだ。今日はベーグルの気分だったのに、と不機嫌な美紀子だったが、相沢の存在に気付いていないようで、心底ホツとする。

「そういえばね、駅前のカフェのメニュー、変わったんだよ？新作のケーキ、ビックリするほど美味しかったわ」

その話題に、再び心臓が大きな音を立てた。まさか、相沢がいることに気付いていたのだろうか。宇宙がビクビクしていると、美紀子はさらに、

「綺麗って、つままない男だけど、パティシエとしては、すごいと思うわ。きつと、将来有名になるわよ」

「つままない、って」

つい最近まで、あんなに夢中になっていたのが嘘のような表現だ。「だって、頭の回転が、遅いんだもん。遠回しに言ったって、全然解ってないし。あの子、ちよつと、足りないんじゃない?」

完全に、彼を馬鹿にしたセリフに、宇宙は自分でも信じられないほどの怒りが込み上げるのを感じた。

「最近、彼女ができたらしいけど、あんなので、よく満足できるわね」

宇宙はまるで、自分が馬鹿にされたような気分だった。

食事中は、黙っていた宇宙だったが、店を出るなり美紀子と大喧嘩になり、丁度通りかかった上司に、こっぴどく叱られてしまった。こういう時、一方的に悪者になるのは、男のほう。さすがに泣いてはいなかったが、怒りが頂点に達して目のつり上がった美紀子は、まるで人を食らう鬼の形相で、今思い出してもゾツとする。あの後、フロアに戻っても一言も口をきかず、根比べをしていた二人だったが、定時が過ぎて徐々に人が減ってきて、最後の二人になるのが怖くて、宇宙は悔しかったが、逃げるように会社を出た。残った仕事は、明日、朝早く来て片付けよう。美紀子が大抵十時出社だということも解っているし、それまでに集中すれば、終わらせることができるはずだ。きつと、美紀子は今頃、宇宙が逃げ出したことを馬鹿にしているだろうが、再び口論になった時の苦痛を想像し、この判断は正しいのだと自分に言い聞かせた。

駅に着いたものの、時計を見ると、まだ午後七時。月曜日でなければ、迷わずあの店に向かうところだが、今日は定休日だ。宇宙は携帯を取り出し、大貴を呼び出すことにした。

「俺も、丁度早く終わってさ。宇宙に電話しようと思ったところだったんだ」

そんな嬉しいことを言いながら、先に着いていた宇宙の向かい側に座る。アルコールには弱いほうだったが、今日は何だか飲みたい気分で、珍しく居酒屋に来ていた。それほど好きでもないビールを頼み、ようやく落ち着いたところで、

「で？ 何があったの？」

大貴がからかうような表情で、尋ねた。

「また、綺羅といざこざか？」

「そんなの、遠い昔のことだよ」

宇宙は今日の出来事を、大貴に話した。話していたら、また腹が立ってきて、

「前から思ってたけど、サイテーな女だよ！自分だって、大して要領よくないくせにさ、」

すると、大貴は、そんな女を、俺に勧めようとしたくせに、と笑う。

「まあ、珍しく、宇宙のほうが正しいな」

「……珍しく、って何だよ？」

それには答えず、運ばれてきたビールで、取りあえず乾杯をして、一口飲んだ。

「綺羅の腕がすごいのは、知ってるし、正直、ちょっと足りないっていうのも、解るよ。でも、綺羅の評価は、綺羅が持つてる全部を足したり引いたりしても、全然プラスなんだから、気にしなくていいんじゃないの？」

中には、自分の価値観だけで偏った評価をする人間もいるよ、と
言って、再び美味しそうにビールを飲む。

「……本人は、気にしてるんだよ」

たとえ、彼に聞こえないところで、だっただとしても、あんな風
言うなんて、許せなかった。

「でもさ、あんなに気に入らなかったヤツのことを、そんなに評価するようになるなんてな。人は第一印象じゃわからないって、ホントなんだな」

大貴はやけに感心したように言う。

「綺羅は、ホントに一生懸命なんだよ。何をするにも、要領が悪くて、人の何倍も時間がかかるけど、それでも、一生懸命やってるのにさ、」

ひたむきな彼の姿は、確実に、宇宙を変えた。自分には何もできないと、ただ嘆いているなんて、愚かなことだ。まだまだ先に進めはしないけれど、それを解らせてくれただけでも、彼に感謝しなくては。

大貴と話して、少し気が晴れた宇宙は、本屋に寄って、迷わずにある本を手に取った。

インテリアコーディネーターの資格試験の問題集。来年の八月に、その試験がある。決して簡単に取れる資格ではないと、先輩が話していたのを思い出したのだ。

『この資格を取れば、少しは綺羅に、近づけるのかな』
そんなことを思いながら、帰宅ラッシュのピークを迎えた電車に乗り込んだ。

水曜日、さつそく勉強を始めようと、問題集と参考書を持って、朝から駅前のカフェに向かった。駅を出て歩いていくと、通りに面した縦長の窓から、向かい合って楽し気に会話をする、いつもの老夫婦の姿が見える。中に入るなり、珍しく床の上を走り回るチワワが足元に駆け寄ってきた。

「宇宙くん、久しぶり」

マスターが厨房から声をかけた。

「珍しいな、本なんか持って」

エプロンで手を拭きながら、客席のほうへ歩いてくる。……何か、いつもと、違うような……。

「……あれ？ 綺羅は？」

「ああ、さっきまでいたんだけどさ。具合悪そうだったから、帰らせたよ」

寂しいか？ と、からかうマスターを睨みながらも、宇宙は頷く。彼はもう、宇宙にとっても、このカフエになくはならない存在になつたようだ。

「昨日から、何か様子が変だつたんだよ。きつと、風邪気味だつたんだな」

寒い時期だから、宇宙くんも気をつけなよ。そう言つて、メニューとウォーターグラスを持って来てくれる。相沢の丁寧な接客に慣れてしまったせいで、マスターが少しだけ、ガサツに思えた。

「ねえ、……綺羅の彼女つて、どんな子が知ってる？」

本人がいないのをいいことに、宇宙はそんなことを尋ねてみた。

「ああ、大人しい子だよ。千賀ちゃんも明るくて八キ八キした子だけど、あの子は、おっとりしてて、何て言うかな、自己主張があんまりない感じでさ、」

「ふーん、」

「綺羅があんな感じだから、もうちょっとしつかりした子のほうが良いような気もするけど、俺がこんなこと言つたって仕方ないし、」
そんなことより、自分はどうなんだ、と言われて、宇宙は膨れっ面になる。確かに、相沢の心配など、している場合ではない気もするが……。何より、ここへ来たのは、勉強するのが目的だつたはずだ。それを思い出した宇宙は、珍しくホツトのダージリンを注文し、真新しい参考書を開いた。

千賀がいた頃は、店の中はいつも、眩しい太陽に照らされているように、明るかつた。可愛い笑顔と、少々高くて、明るい声。常連のおじさん連中の相手も上手で、笑い声が絶えなかつた。そしてこの四月、相沢が来てからは、春先の、柔らかい陽射しを思わせる、穏やかな明るさに変わった。とろけるような笑顔と、おっとりとして優しい口調。控えめだけれど、温かい光が、来る人の心を照らす。二人とも、そこにいるだけで、周りの人間を癒す力を、持っているのだ。もしかしたら、マスターは、ちゃんとそういうところを見抜いて、雇っているのかも知れないな。観葉植物の枯れた葉を取りな

がら、元気な葉っぱまで取ってしまったって声を上げているマスターのほうを見ながら、宇宙は思った。

「宇宙くん、綺羅の様子、見て帰ってくれないかな」

思いのほか進まなかった参考書を手に、帰ろうとすると、マスターが言った。

「あいつのことだから、病院も行っていないと思うんだ」

「……彼女がいるから大丈夫だよ。俺が行ったら邪魔でしょ」

野暮なことだけは、したくない。マスターもそれには納得したが、「そうだったな。どうも、綺羅とあの子、恋人同士に見えないんだよな」

そんな意外なことを呟き、あいつには言うなよ、と念を押して宇宙を見送った。

彼女の噂

冷戦状態だった美紀子ともすっかり元通りになって、久しぶりに例の和食の店でランチを食べていた。ジャケットを羽織ってはいるけれど、相変わらず、白いシャツの下に、ヒョウ柄の下着が透けて見えている。さすがに見慣れてきて、それが彼女の制服のように思えてこなくもなかったが、周りにいる清楚な制服に身を包んだOLたちに比べると、やっぱり相当、攻撃的だ。

「私ね、ボディボード始めたの」

また、突拍子もないことを言い出して、宇宙を驚かせる。

「今日も、会社に来る前に、プールに行ってきたんだ」

まあ、時間をどう使おうと、個人の自由だが、宇宙には到底、信じられない行動だ。人工的に波を起こして、屋内でも練習ができるというが……。聞くと、今の彼氏がマリンスポーツのインストラクターをしていて、その彼の勧めで始めたらしい。

「宇宙くんも、少しは体、動かしたほうがいいよ」

その忠告は、尤もだ。宇宙は就職してから、殆ど運動らしい運動をしておらず、そろそろ何かしなくては、と思っていたところだ。しばらく、そのボディボードが何たるかを話していた美紀子だったが、ふと思いついたように、こんなことを口にした。

「そういえば……こないだ、綺羅がこのビルに勤めてる女と一緒にいるとこ見たんだけど」

チラツと宇宙の目を見て、食後のお茶を一口飲んだ。

「あれがもし綺羅の彼女なら、相当悪い女だよ。綺羅のこと、助きたいなら、あの女と別れさせたほうが、いいわよ」

「……どういうこと？」

「これは事実だから、前みたいにキレないでよね」

美紀子はそう前置きする。

「あの女が友達と喋ってる所へ、偶然通りかかったとき、言って

たの。綺羅が将来、売れっ子のパティシエになったら、セレブな生活ができるから、今はつまらなくても我慢してるんだ、って。綺羅は馬鹿だから、このままダメして、婚姻届にサインさせれば、簡単に結婚まで持ち込める。それに、ここで一緒にランチしてるだけで、同僚たちに羨ましそうに見られるのが、快感なんだって。どう？
ビックリでしょ」

宇宙は開いた口が塞がらなかった。

その日は、残業もそこそこに、会社を出て、駅前のカフェへ飛び込んだ。一刻も早く、相沢を助けたいと思ったのだが、そこには、噂の彼女が、来ていた。一度見たことがあるだけにもかかわらず、ハッキリと認識できるのは、彼女のことが無意識に気になっていたからなのだろう。その大人しそうな顔を見ただけで、胸の中に憎悪が生まれるのが解ったが、必死にそれを抑え、空いている席に、座る。ところが。

「いらっしやいませ」

いつものように、メニューとウォーターグラスを運んできた相沢の様子が、おかしい。いつもなら、しっかりと客と視線を合わせて、とろけるような笑顔で会釈するのに、今日は、宇宙と目を合わせようとしない。どうしたのかと、尋ねると、ようやく宇宙の目を見て、

「いえ、何でもありません、……すみませんでした」

逃げるように、厨房へと戻って行った。

「……変なの」

思わず呟いて、メニューを開いた。が、例の彼女が気になって、メニューを見ているフリで、様子を窺ってみる。いつも、千賀と一緒に来ていたらしいが、今日は一人のようだ。いかにも育ちの良いお嬢様風で、きちんと背筋を伸ばして座り、読書をしている。着ている服も、派手すぎず、地味すぎず、好感が持てた。ブックカバーをかけた本の中身までは解らないが、美紀子から聞いた、悪女の要

素など、何処にも見当たらない。……そもそも美紀子が言ったことは、本当なのだろうか。

「ご注文は、お決まりですか？」

いつの間にかそこにいた相沢に驚いて、宇宙は冬なのに、アイスティーを注文してしまった。かしこまりました、と、口調は丁寧だが、やはり、いつもの笑顔がない。その後ろ姿を訝し気に見ていると、

「……喧嘩でもしたか？」

今度は背後から、マスターが宇宙を驚かせた。

「喧嘩？」

マスターは宇宙の向かい側に腰を下ろして、

「綺麗とだよ。何か、様子が変じゃないか？」

「喧嘩なんてしないよ。俺だって今、何か変だなんて、思ってたところなのに」

「ならいいけどさ。どうも、最近、……」

相沢がアイスティーを運んできて、マスターは口を嚙んだ。二人して、相沢の顔をジッと見ていると、目が合って、

「ご、ごゆっくりどうぞ」

明らかに、動揺した様子で、再び逃げるように厨房に戻って行った。

「おかしいだろ？」

「うん、」

「宇宙くん、わけを聞いてみてくれよ。何か、悩みがあるのかも知れないし」

「自分で聞けばいいじゃん」

「馬鹿、こういうことは、歳が近いほうが、いいんだよ」

頼んだよ、と、一方的に言って、厨房へ引き上げていく。宇宙は、もしかしたら、そこに座っている彼女が原因なのではないかと、勘ぐってみた。美紀子が言った、悪女の要素を、うっかり、見てしまったのかも知れない。それで、動揺しているのだとすれば、納得で

きる。

『それなら、話は早いよ』

二人を引き離すには、丁度良い機会だ。宇宙はいつも持ち歩いて
いる参考書を開いて、相沢の仕事が終わるのを、待つことにした。

再会

門限が厳しいのか、それとも育ちの良いお嬢様を演じているのか、八時を過ぎた頃、相沢の彼女は店を出て行った。きちんと、マスタ―にも挨拶をしていく様子を眺めながら、宇宙は思わず、腕組みをして考え込んでしまう。先入観なしに見れば、これほど感じの良い女性は、そうはいない。美紀子が言ったように、これが全て演技なら、と思うと恐ろしくなってきた、彼女が座っていたテーブルを片付けている、相沢の後ろ姿をジツと見つめた。こうやって彼女の情報を持つている宇宙が疑惑の目を持って見ても解らないのに、相沢に解るはずがないではないか。

「ねえ、」

宇宙は思い切って、相沢に声をかけた。

「今日、このあと、何か予定あるの？」

まだ様子のおかしい相沢は、ただ、首を横に振る。

「じゃあ、一緒に帰ろうよ。待ってるから」

もうすぐ閉店だから、それまで勉強していればいいと思ったのに、宇宙の申し出に驚いたような顔をしている。迷っているのか、いつまでたつても返事をしないので、

「……イヤだったら、いいけどさ。たまには、一緒にご飯食べようと思っただけだから」

言いながら、宇宙はふと、ある考えに突き当たった。先日、一緒に食事をした時のこと。

『宇宙さん、間違ってます』

彼があんな風に言うことが、ごく稀だというのは、短い付き合いの宇宙にも解る。何の努力もせず、自分の境遇に文句ばかり。常に全力で頑張っている彼にとって、宇宙はもう、尊敬に値する人間で

はなくなったのだ。それどころか、宇宙のことを、軽蔑したのかも知れない。そう考え出すと、宇宙は急に居たたまれなくなり、

「やっぱ、いいや。先帰るね」

そう言って、逃げるように店を出た。

駅まで一気に走って、さすがに息切れがし、足を止めた宇宙は、丁度電車がドアを開いて待っていてくれるというのに、ホームのベンチに腰を下ろした。呼吸を整えながら、電車を見送り、あの日に自分が口にしたセリフを、思い返してみる。大学を卒業していても意味がないだの、転職するために資格が欲しいだの、自分の今までの道のりが、まるで無駄だったかのようだ。同時にそれは、自分を卑下しているようで、一緒にいた彼をも、馬鹿にしているのではない。美紀子が直接的な表現で相沢を馬鹿にした時、あれほど腹が立つたくせに、自分も遠回しなだけで、結局同じことをしてしまっていた。

『傷ついたんだろうな』

ようやく、彼の気持ちに気がついて、宇宙は愕然とした。彼を、応援しているつもりだったのに。今となっては、それもただ、おこがましいだけのように感じる。自分が情けなくて、恥ずかしくて、溜め息も出なかった。

二本目の電車も見送った時、隣に座った女性が、宇宙の顔を、覗き込んだ。

「やっぱり。宇宙くんだ」

「……千賀ちゃん、」

思いがけない、再会だった。

「どうしたの？」

元気ないよ、と、笑う。懐かしい笑顔。八重歯が可愛いのも、パツチリとした瞳が綺麗なものも、変わっていない。違うのは、あの店の制服でないことだけ。あれほど会いたかった人が目の前にいるのに、何も言葉が出て来なくて、宇宙はまた、俯いた。

「家具メーカーに就職したんだってね。マスターに聞いたよ」

「……うん」

「宇宙くんには、ピッタリな仕事なんじゃない？インテリアとか、好きでしょ？」

自分でもよく解らない。実務に就いて半年が経っても、まだ、これが自分の仕事だ、と胸を張って言えるまでにはならなかった。

「向いてるのかどうかは解らないけど、やっと、慣れてきたよ。千賀ちゃんは？ 仕事、慣れた？」

「何とかね。でも、朝から晩まで座ってるのも、辛いな」

カフェで走り回ってたのが懐かしい、と笑う。やっぱり、可愛い。宇宙はようやく、少しだけ笑顔になった。

「うーん。仕事の悩みじゃないのかな？」

千賀はそう言って、また宇宙の顔を、覗き込む。それで初めて、自分が千賀に心配されているということ悟った。宇宙は慌てて、「ごめん、久しぶりに会ったのに。ちょっと今、自分が許せなくて」とすると千賀は、可笑しそうに笑う。

「大袈裟ね。何があったの？」

「……話せば、長くなるから」

誰かとの約束があるかも知れないと思って、そう言つと、

「ずーっと会ってなかったんだから、すっごく長くたって構わないよっ」

そのからかうような言い方が、懐かしかった。店が暇なとき、何でもないことでしょうか。ちゆう悩んでいた宇宙の、話し相手になってくれたことを思い出した。いつも明るい声を聞いているだけで、気分が晴れた。

「そうだ、あのカフェで話さない？ あそこだったら、気楽でしょ？」

「……」

たった今、その場所から逃げ出してきたところなのに。宇宙は正直に、相沢とのいきさつを話した。そのつもりはないのに、彼を、

傷つけてしまったこと。本当は、尊敬しているのに。

「もう、綺羅には会えないよ。向こうだって、会いたくないって思ってるだろうし」

さっきの、よそよそしい態度。それが意味することは、一つしかない。

「大丈夫だよ。綺羅くんは、そんなことで怒ったり態度を変えたり、しないんだよ」

千賀はそう言ってくれたが、宇宙にはもう、あの店に行く勇氣はなかった。自業自得、だけど、あまりにも悲しすぎる。取り返しのつかないことをしてしまったという激しい後悔が、胸の中でいつまでも宇宙を苦しめていた。

盗み聞き

社会人になって初めての正月休みが、あつという間に終わった。就職するということは、お年玉を与える側に回るのだということを知ったのが、一番の衝撃だったくらいで、それ以外は特に例年と変わった出来事もなく、今日、仕事始めを迎えている。

気まぐれな上司が、席替えをするぞ、と張り切って、二時間かけてフロアのデスクのレイアウトを変えた。それなら年末に大掃除をした時に言ってくればよかったのに、と思いながらも、少しは気分が変わるかと、新しい場所になった自分の席に座ってみる。がいる人間は、同じ。見える景色は少々変わっても、かかってくる電話や聞こえてくる声は変わるはずもなく、やっぱり代わり映えのないフロアで、去年に引き続き、提案書の作成を始めた。

マイホームを新築する大抵の客は、無難にまとまったインテリアを好み、経験値の乏しい宇宙の提案にも満足してくれる。しかし、時々現れる、奇抜で斬新なコーディネートを求めてくる客が、厄介だった。営業マンはただ、営業をするだけで、実務は宇宙たちのような裏方の仕事。窓口は営業担当一つのため、クレームの矢面に立たされることは稀だったが、それでも、提案したコーディネートの文句を言われると、結構傷つく。もともと、凝ったインテリアを眺めるのは好きだが、提案する側に回るとは思ってもみなかった人種だ。この仕事が得意か不得意かも解らないまま、一年が経ってしまったけれど、これでいいのだろうか、と、時々、不安になる。

「三年は、かかるよ」

ベテランの先輩はよく、そう言う。職種に限らず、自分の仕事に手に馴染んでくるまで、三年はかかるというのだ。今はまだ、新しい革靴を履き慣らしている時期なのだと。膨大な件数をこなしてきたおかげで、仕事の流れや要領は、ほぼ完璧に頭に入っていたが、コーディネートのセンスまで身に付いたかどうかは、疑問だ。

ずつとかかりつきりだった提案書がようやく完成して、時計を見ると、既に十三時。時間が飛ぶように過ぎると言うが、まさしくそんな感じだ。時間を知った途端、急に空腹を覚え、時計に支配される日本人の悲しい性に苦笑する。宇宙は立ち上がって伸びをすると、財布だけ持って、オフィスの外に出た。

時間が遅いのもあるだろうが、まだ休みが明けていない会社もあるようで、地下のレストラン街の混雑は殆どない。難なく空席を見つけて食事を始めた宇宙は、何処からともなく、聞き慣れた声がすることに気がついた。

「最低！ 人の男を盗るなんて！」

「人聞きの悪いこと、大声で言わないでよ！」

後のほうは、やっぱり千賀の声だ。間違えるはずがない。

「私が何て言われたと思う？ 最初から好きじゃなかったのに、ごめんなさい、だよ？ 馬鹿にしてるわ！」

「それを私のせいにするのはおかしいでしょ？ 紹介してって言うから、マスターに頼んで、紹介しただけじゃないの。そこから先のことは、佐和子の責任でしょ」

完全に、食事をする手が止まってしまった。佐和子という相手は例の、相沢の彼女なのだろう。大人しいイメージからは程遠い口調だ。化けの皮が剥がれるとは、こういうことを言うんだな、と思いつながら、宇宙にはそれが何の話題か手に取るように解って、気付かれないのを良いことに、真剣に耳を澄ます。

「私だって、それほど好きじゃなかったわよ！ 何より質たちが悪いのは、あんただわ。全然興味ないフリしちゃって」

いつものように混雑していれば、その会話も周囲のざわめきの中に溶けてしまっただろうが、今日はそうはいかなかった。話題が話題なだけに、店内は必要以上に、静まり返っている。

「好きでもないのに、どうして付き合おうとするの？ そこが間違ってるって言ってるのよ」

千賀の言葉に、宇宙は大きく頷きそうになった。どうやら美紀子

から聞いた噂は、本当だったようだ。

「あの人はね、佐和子が好きな、遊び慣れた男とは違うの。そんなの、すぐ解ったはずだわ。どうしてそのときすぐに、別れなかったのよ？」

「私の勝手でしょ。私はね、お金持ちになりたいっていう夢があるの。何不自由なく暮らせるお金があつて、束縛しないなら、相手は誰だっていいわ。そのために、将来有望な男をキープして何が悪いの？ 結婚と恋愛は別なのよ！」

これ以上聞いていると、食欲をなくしそうな気がして、宇宙は急いで食事を終え、店をあとにした。

その日は全く仕事が手につかず、年明け早々、深夜残業をする八メになってしまった。帰宅ラッシュのピークをとくに過ぎた電車に揺られて帰宅した宇宙は、いつものコンビニ弁当を食べながら、一人、考える。あれからずっと、駅前のカフェに行けなくて、ブリキの車を見るたび、溜め息。当然、相沢と彼女がどうなったかなど、知る術もなかった。

「別れたんだ……」

意外な気持ちと、それで良かったんだと安堵する気持ちが交互に顔を出す。思ったことをすぐ口にできず、振り回されているばかりだと思っていた相沢が、自分から、別れを切り出したのだ。そして、その理由は……千賀を好きになったから？

宇宙は、自分の中の複雑な感情を整理できず、膝を抱えた。昼間の彼女たちの会話から、既に相沢と千賀が付き合っているのは明らかだ。宇宙には二年かけてもできなかったことが、相沢には簡単にできたということ。悔しい、羨ましい、憎らしい。また、そんなろくでもない感情が芽生えてきて、唇を噛む。しかし、珍しくもう一人の宇宙が、耳元でこう言った。

「一回でも、告白した事があったのかよ？」

そう、最初から、諦めていたくせに。そんな狡い人間が、相沢を

妬むなんて、可笑しい話だ。

『好きだつて言つてなくせに、付き合えるはずないじゃん』

苛立つた宇宙は、食事をやめ、ベッドに寝転がった。戦いのリングに上がらないなら、ただの傍観者と、同じ。あんな可愛い子に、カレシがないはずがない。だから、告白したつて、無駄。そうやって、いつも諦めていた。

『きつと自分を軽蔑してるに違いない。だから、もうあの店には行けない』

それも、同じこと。相沢のせいにしてはいるけれど、全部、自分の狡さが作り出した、諦めという名の、見えない壁のせいなのだ。

宇宙は、あれ以来ずっと置きっ放しだった、インテリアコーディネーターの参考書のホコリを払い、テーブルの上に広げた。もう一度、あの店に行けるようになるには、どうすればいいのか。頑張っている相沢と、対等に向き合えるだけの、努力が必要だ。どうせ受かるはずがないなんて、もう思わない。絶対、受かってやる。そう心に誓った。

誕生日パーティー

テレビもゲームも雑誌も禁止。仕事から帰ると、すぐに手が伸びそうになるリモコンや携帯を、机から最も遠い下駄箱の上に隔離する生活が始まった。その結果、三日坊主という魔物に見事に打ち勝って、休日の静かな部屋で机に向かっていた宇宙に、思いがけない電話がかかってきた。相手は、大貴で、駅前のカフェからかかっているという。

「今度の月曜日さ、ヒマ？」

電話の向こうで、千賀の声が聞こえている。それを気にしながら手帳を開き、特に夕方の打ち合わせも入っていないことを確認して、「頑張れば、七時ごろには終われるはずだけど。なんで？」

「誕生日のパーティーをするんだ、綺羅の。宇宙も来るだろ？」

そんな誘いだとは夢にも思わなかった。即答できなくて、溜め息になる。すると、

「最近、全然来てくれないってマスターが言ってるけど、ホントか？」

大貴とも、あれから殆ど会っていない。年末は宇宙も大貴もサービスマンで、売り上げだの何だのと忙しく、年明けからは研修が入ったり、大貴が社員旅行で海外に行っていたりと、ゆっくり話す時間が取れなかった。

「……うん。ちょっと、忙しくて」

最も使いたくない、ウソの言い訳。忙しいから無理、と言う原因の殆どは、自分が意図的にした時間配分で、そこに時間を割かなかった結果だと聞いた。正しく、その通り。

「あ、それと、千賀ちゃん何か話があるって。電話替わるね」

宇宙が返事をする間もなく、電話の向こうの相手が替わった。

「宇宙くん？ 久しぶり。元気？」

最も答えにくい質問。一応、元気だと答えてみる。千賀は何の話

をするつもりか、店の外に出たようだった。聞き慣れた、ウエルカムチャイムの音が聞こえる。

「あのね、前に会ったとき気にしてた事、やっぱり、宇宙くんの思い違いだよ？ だから、もう何にも気にしなくていいんだよ」

「……ホント？」

「綺羅くんに直接、聞いたから。あ、もちろん、それとなく、だから、心配しないでね」

「……」

心の底から、ホツとした。過去にこんなに嬉しかったことがあるだろうか、と思えるほど、嬉しくて、涙が出そうになる。常に抱いていた醜い嫉妬や、劣等感も、瞬時に何処かへ消えた。

「ホント、宇宙くん、変わってないんだから。余計な取り越し苦労するタイプだよ」

少々、呆れたように言われて、恥ずかしくなる。大学時代、彼女とうまくいかなかったり、試験の出来が悪くて単位を落としそうな時、いつも愚痴を聞いてくれていた千賀だが、その頃も、しょっちゅうそう言われていた。

『大丈夫だよ。宇宙くんは、深刻に考え過ぎだよ』

『後ろ向きな事はつかり考えてないで、もっと彼女を喜ばせてあげること、考えたら？』

恐ろしく前向きな千賀は、そんな宇宙に呆れながらも、色々な案を一緒に考えてくれた。それを思い出して、納得する。いつも前を見て頑張っている相沢が、彼女を好きになった理由と、彼女がそれを、受け入れた理由に。

「月曜日、来るでしょ？」

からかうように尋ねられ、宇宙はようやく笑って、

「絶対行くよ」

そう答えた。

約束の時間を少し過ぎて、ようやく残業を終えた宇宙は、机の上の書類たちをかき集めて、一応片付けたように見せ、急いで会社を飛び出した。あのカフェに行くのは、二ヶ月ぶり。何だか初めての店に向かうより緊張してきて、満員電車の吊り革を握りしめる。いつもなら座りたくなる距離なのに、今日はあつという間に目的の駅に着いてしまった。自分の思い違いだったんだし、何ら構える必要はない、そう解っていて、早い鼓動は治まらなかつた。

久々のカフェの前まで来て一息つき、貸し切り、という張り紙がされた硝子戸を開けると、

「あ、やっと来た！おまえのせいで、ケーキが溶けそうだよ」

そう言つて、大貴が急かすように手招きする。すでに火の灯された蝋燭が、雫を垂らしていて、宇宙の到着を待っていた事は明らかだった。

「いらつしゃいませ」

相沢が、その声をかけた。今日は定休日なのに、いつもの癖なのだろう。今日はおまえが主役なんだから、と、マスターが笑う。

「宇宙くん、随分久しぶりじゃないか。心配してたんだぞ？」

「……そうだね。いろいろ、あつてさ」

千賀だけが知っている、「いろいろ」のはずだったが、どうやら周知の事実、に変わっているらしい。積もる話はあとにして、という大袈裟なマスターの言葉で、ようやく蝋燭の火が吹き消され、パーティーが始まった。来ているのは、普段からここに入り浸っているマスターの釣り仲間が数人、仲良しの老夫婦とチワワ。千賀と、大貴と、宇宙。それだけでもう一杯になってしまふ狭い店内が、大好きだ。あらためてそれを確認し、フツと笑みを零す。

「会費をもらわないかわりに、セルフサービスだからな」

テーブルを寄せてくつつけた臨時テーブルの上には、マスターが作つたらしい料理が、所狭しと並べられている。どれから食べようかと悩んでいると、

「宇宙さん」

突然声をかけられて、手に持っていた皿を落としそうになった。

「来てくださって、ありがとうございます」

以前と変わらぬ、とろけるような笑顔だった。垂れ目で、いつも笑っているように見える、口元。

「あの、それと、すみませんでした」

今度は躊躇いがちにそう言って、頭を下げる。

「僕のせいで、宇宙さんに、変な勘違いをさせてしまったみたいで」

「あ……それは、こっちこそ、ごめん。勝手に、勘違いして、」

狭い店内は、早くも酔っぱらいの巣窟と化してきていて、異様な雰囲気に興奮したチワワが走り回っている。大貴も千賀も、その相手をするのに手を焼いているようだった。

「外、出ない？」

寒いけど、と、宇宙は店と更衣室や倉庫のある建物の中の、中庭を指差した。一応、テーブルと椅子が二組置かれていて、小さなオープンカフェの雰囲気味わえる。あいたスペースには、料理に使うハーブ類や野菜が植えられていて、その成長を眺めるのも楽しい。今はミントと水菜が元気に葉を茂らせていた。

「マスターに、叱られました。いくら常連さんって言っても、お客様一人なんだから、失礼な態度は絶対ダメだって」

本当にすみませんでした、と、また頭を下げる。

「そんなこと、……ちょっと、変だなって思ったくらいだよ、あの時は。……何か悩みでも、あったの？」

千賀から、詳しくは本人に聞いてね、と言われていたから、尋ねてみた。すると、帰ってきたのは、また意外な答えだった。

「宇宙さんが、千賀さんのことを好きなのは、知ってましたから。」

……それなのに、僕も、好きになってしまった」

それに加えて、佐和子になかなか別れを切り出せず、その罪悪感から、拳動不審になっていたのだと告白した。宇宙は呆気にとられていたが、ようやく全てに納得する。と同時に、何だか情けない気分になってきた。

「あのさ、そういつふつに気を遣われることが、一番……」
傷つく、と言いかけて、思いとどまる。せめて今日くらいは、後
ろ向きに考えるのはやめよう、と思ったから。代わりに、

「そうだ、プレゼント」

昨日、アンティークショップで見つけた、小さな陶器のウサギ。

垂れ目で、耳も垂れていて、見た瞬間、相沢の顔を思い出した。し
かし今になって、男の誕生日に贈るものではない気がしてきて、

「家で開けて。恥ずかしいから」

そう言って、ラッピングされた箱を差し出す。相沢は、とろける
ような笑顔で、頷いた。

「で、どうやって告白したの？」

やっと、二ヶ月前に戻った気がしてホッとした宇宙は、尋ねた。

すると相沢は、プレゼントの箱を手の中で弄びながら、再び意外な
答えを返す。

「……伝票に、書いて」

宇宙が驚いて見つめると、恥ずかしそうに、俯いてしまった。相
沢らしい、と笑うと、

「すごく、緊張したんです！ 今まで、自分から告白なんて、した
ことなかったから」

真剣に、訴える。最初に彼が千賀と付き合っていると知った時は、
憎らしいと思ったが、こうして面と向かっていると、全く憎めない
のが不思議だ。

『好きです』

ただ、それだけ。その一言を、もし宇宙が口にしていたら？ ……
…また後ろ向きに動き出した思考回路を、慌てて止める。今さらそ
んなことを考えたところで、どうなるわけでもないのだから。

さすがに寒くなってきて、二人は騒がしい店内へと戻った。老夫
婦はいつものように仲が良く、チワワは膝の上。千賀は、この店で
働いていた頃と同じように、おじさん連中の相手をし、大貴とマス

ターは車の話。そして宇宙と相沢は、

「お腹減ったし、食べよっか」

「はい！」

とろけるような笑顔で頷き、手際良く、料理を皿に載せて手渡し
てくれる。地元の料理店で働いていた頃の話や、フランスでのパテ
イシエの修行の話を初めて詳しく聞きながら、宇宙は、高校時代の
文化祭の話や、大学受験の話、そしてこの店を知った大学時代の話
をした。興味津々に相槌を打つ相沢を見ると、こうして想い出
を語る事ができたなら、中途半端な学歴にもちやんと意味があつた
気がして、少しだけ、嬉しくなった。

胸騒ぎの秋

駅前のカフェのメニューに、幾つも新しいケーキが増え、宇宙のインテリアコーディネーターとしての仕事ぶりも、ようやく板についてきた初秋の頃。いつものように休日の朝の、のんびりした時間の流れを堪能していた宇宙の耳に、気になる話題が飛び込んできた。マスターの釣り仲間で、とつくに還暦を過ぎている吉井は、殆ど毎日と言っていいほど、この店に入り浸っている。

「まだ若いんだから、引退なんて考えなくていいだろ」

引退？ 宇宙は何だかイヤな予感がして、耳を澄ませた。

「まあ、そうだけどさ。でも、あの子に、行く行くはこの店を譲ろうかなって、思ってるんだ」

「気が早いな、」

還暦までまだ十年以上もある人間が口にするセリフじゃないよ、と吉井は笑う。しかしマスターは、

「うちは子供もいないし、綺羅にだったら、安心して任せられるから。それに……最近、何だか調子が悪くてさ。ちよつと店を休みにして、人間ドックでも入ってこようかと思ってるんだ。もし悪い病気だったら、イヤでも辞めなきゃならないだろうし」

「確かに、ちよつと痩せたな。きつと働き過ぎで、疲れてるんだよ」

宇宙は、聞いてしまったことを、後悔した。恐怖に近い胸騒ぎに襲われて、思わず、席を立つ。他に客がいないのをいいことに、厨房の相沢のところへ行った。

「……どうか、しましたか？」

宇宙の顔に、不安の色を感じ取ったのか、相沢は作業をしていた手を止め、心配そうに声をかける。

「ううん、何でも、ない、けど」

何でもないと思わせる事など、到底不可能な返事しかできなかった。まだ昼前の、静かな店内。マスターたちの会話は、すぐにいつ

もの釣りの話題に変わって、笑い声さえ聞こえてきたが、宇宙は笑う事が、できなかった。

「宇宙さん？ 大丈夫ですか？」

さすがに相沢も不安になったのだろう。黙ったままの宇宙を連れて、裏口から外へと出た。

「中じゃ、話しづらい事かと思つて。……僕で良かったら、聞きますよ？」

そう言つて、柔らかい表情を向ける。しかし、口にしたら、現実になつてしまいそうで、怖かった。

「……マスターの、ことですか？」

その言葉に、宇宙は顔を上げた。

「僕も、心配なんです。マスターは、何も言わないけど、具合が悪いのは、見てたら解りますから」

「……、」

「でも、きつと大丈夫。すぐ、元気になつてくれますよ」

だから、元気出してください。そう言つて、いつものとろけるような笑顔になつた。こんなにも、彼の笑顔に救われたのは、初めてだった。

それから二週間ほどが経ち、残業を終えて、帰宅しようとした宇宙は、駅前のコンビニの壁に凭れた、相沢の姿を見つけた。沈んだ表情なのは、暗がりでも見て取れる。その理由は容易に推察することが出来たが、ハッキリと確認するのが怖い。しかし、彼がここで自分を待っていたことも明らかで、宇宙は、意を決して、近づいて行つた。

「綺羅」

初めて、名前を呼んでいた。

「……宇宙さん」

相沢は、宇宙に気付くと、その瞳から、幾つも涙を零した。

「マスターが、」

その先は、口にはしなかった。

宇宙は、一人では歩けない状態の相沢を、自分の部屋へ連れて行った。急激に深まった秋のせいか、やけに寒く感じる部屋を温めるために、エアコンのスイッチを入れて、お湯を沸かす。時計を見ると、十一時を少し回っていた。相沢がいつも帰宅するのは九時過ぎだから、二時間近く、あそこで待っていたということになる。震える体は、寒さのせいもあるのだろう。宇宙は毛布を彼の肩にかけてやり、作ったココアを、テーブルに置いた。

怖くて、あれから店には行っていない。きっと大丈夫だと言った相沢の笑顔に望みを託していた。……それなのに。

「宇宙さんに、話があるから、会いたい、って、言ってみました」
途切れ途切れに、一生懸命、声を出してそう言った。

「明日にでも、行ってあげてください。駅前の、病院です」

瞬きをするたび、彼の瞳から、涙が零れる。それを伝えるために、待っていてくれたのだ。頷く宇宙の目からも、涙が零れた。

「ありがとう、……明日、必ず行くよ」

宇宙がそう言うと、ありがとうございませす、と、消えそうな声で言った。

彼らの望み

翌日、宇宙はまず、高熱を出してしまつた相沢に風邪薬を飲ませ、大人しくしているようにと言ひ聞かせて、部屋を出た。日曜の昼過ぎで、人出も多い。電車に乗り、いつもの駅で降りたが、カフェのある東側ではなく、滅多に通らない西側への通路を渡ると、途端に静かになった。心なしか殺風景な印象を受けるのは、この先に病院があることへの配慮だろうか。そんなことを考えてみる。病院というところは、ただでさえ近寄り難い場所だったが、今日宇宙を向かわせている、これまでの何より異質で、とてつもなく恐ろしいものの存在が、無意識に歩調を緩ませていた。ハイヒールの女性が、靴音を響かせて、そんな宇宙を追い抜いていく。まるで責め立てられているような気分になつて立ち止まり、その音が聞こえなくなるのを待つて、再び歩き出した。

「今日、一番のお客さんだな」

病室に入るなり、マスターが言った。紅茶も何も出せないけど、と、呼んでいた雑誌を閉じる。

「わざわざ来てもらつて、悪いね。急にこんなところに、閉じ込められちゃつたもんだからさ」

何か言いたくても、言葉が見つからなかった。いつも厨房にいたマスターが、病院の白いベッドの上にいる現実を、すぐには受け入れられない。黙っている宇宙に、マスターは笑いながら、

「そんなに神妙な顔するなよ。いろいろ言にくいじゃないか」

そう言つて、見慣れたグラスに水を注いで、一口飲んだ。

「これさ、綺羅が店から持つて来てくれたんだ。少しでも気が紛れるように、つて。優しいヤツだよな」

マスターは、窓から入る柔らかい陽射しが、そのウォーターグラスで屈折する様子を眺めながら、

「綺羅は、どうしてる？」

「……風邪ひいたみたいで、……熱出して寝てる」

随分長い間、声を出していない時のような、かすれた声しか出なかった。

「そうか、可哀相に」

会話はそこで一旦途切れ、再び沈黙した宇宙は、痩せて細くなったマスターの顔を見つめた。

「昨日、綺羅には話したんだけど、」

そう前置きして、マスターは体を宇宙のほうに向ける。

「俺はもう、長くない。過去の症例から、回復する見込みは殆どないって、ハッキリ言われた。だから、あの店をどうするか、決めておきたいんだ」

とうとう、その言葉を、聞いてしまった。堪えていた涙が頬を伝って、膝の上で握りしめた拳の上に、落ちる。

「俺は、綺羅に、あの店を譲ろうと思う。あんなにもあの店を大事にしてくれて、あんなにも一生懸命に店のために働いてくれるヤツは、綺羅の他にはいないから」

その言葉に、宇宙は泣きながら何度も頷いた。最初、彼を嫌いで仕方なかったのは、自分があの店を愛する気持ちより、彼が店を愛する気持ちのほうだが、大きかったから。今になって、やっと、解った。

「でもさ、こんなこと言ったら、あいつが可哀相だけど、ちょっと頼りないだろ？ パティシエとして、ギャルソンとしての腕は、超一流だけど、経営とか、そういう現実的な部分まで任されるのは、負担だと思うんだ。それで、俺なりに考えたんだけど」

そこで、マスターはジッと、宇宙の目を、見つめた。

「宇宙さんに、そこを、頼めないかな」

「……え？」

「綺羅の足りないところを、補ってやる仕事。銀行員だった俺にも出来たんだから、難しいことじゃないと思うよ。食材や調理の知識は、綺羅がちゃんと解ってるから、なくても大丈夫。ただ、お金

のことだけ、考えてくれればいいんだ。有り難いことに、もう一人や二人、バイトを雇う余裕は充分あるから、宇宙くんは今の仕事を続けながらもいい。……一度、考えてみてくれないかな」

宇宙はただ、頷いて、病室を出た。替わりに、釣り好きの常連客が連れ立って、病室へと入っていく。賑やかな話し声が聞こえて、また、涙が出た。

帰宅した宇宙は、まだ眠っている相沢の額に、手を当てた。幾分熱はひいたようで、呼吸も落ち着いてきている。その寝顔は何だか幼くて、こんな時なのに、フツと笑いが漏れた。彼が持つ癒しの力は、もう何度も、宇宙を助けている。あんなに気に入らなかったのが嘘のように、今は何とかして、笑顔を取り戻してやりたいと思った。それには、どうしたらいいのだろう。彼には簡単なことが、宇宙には難しく、途方に暮れた。

睡眠薬でも飲ませてしまったかと不安になって来た頃、ようやく、相沢が目を覚ました。そこが宇宙の部屋であることに気付いて、まず、謝る。どうやら昨晚のことは、全く記憶にないようだった。

「……もう、平気？」

「はい、ありがとございました」

その風邪声が可笑しくて、宇宙はまた、吹き出す。

「マスターのとき、行ってきたよ。見た目には、元気そうだった」

宇宙は、マスターから聞いた話を、相沢にそのまま、伝えた。店を譲るといふのは、既に聞いていたようで、普通に考えたらそんな夢のような話に、浮かない顔をする。

「あのお店は、マスターのお店なんです。だから、そんな話、聞きたくないのに、」

「そうだね。俺も、聞きたくなかったよ。でもさ、安心、させてやりたいじゃん」

相沢は黙って、悲し気に視線を落とした。宇宙も今までハッキリとは知らなかったが、マスターは銀行を辞めたあと、すぐに離婚し

ていて、子供もいない。全くの他人の手に渡ることを考えたら、最も店を良く知る従業員に譲ろうと思うのは、自然な流れのような気がした。

「手術をすれば、良くなるかも知れないって、……だから、こんな悲しい話は、そのあとにしようって、言ったのに」

若いから癌の進行が早いのも、過去の症例から生存率が低いのも事実だが、手術をしてみないと、解らない。医者は、そう説明していたようだった。過去の症例は、あくまで、症例。マスターも同じだとは、限らない。

「何だよ？ 俺にはもうダメみたいな言い方してさ。まだ、そうと決まったわけじゃないんだよね？ ……俺、もう一回、行ってくる」
宇宙は勢い良く立ち上がり、驚く相沢を部屋に残して、再び病院へと向かった。

「……何だ、さっき帰ったばかりじゃないか」
息を切らせて病室に飛び込んだ宇宙に、マスターは驚いたように言った。

「もう返事を持って来てくれたのか。さすが、仕事が速いな」
嬉しそうに笑う。手には釣りの雑誌を持っていた。

「違うよ。文句を言いに来たんだよ。手術で良くなる可能性があるんだろ？ それなのに、遺言みたいなこと言い出して、こっちの寿命が縮まったよ！」

宇宙のセリフに、マスターは声を上げて笑った。

「笑い事じゃないよ！ マスターが弱気になって、綺羅がどんなに落ち込んでるか……。タバなんて、ずっと泣いてたんだから、」

「……、」
「俺は、綺羅があのお店を継ぐなら、何でも手伝うつもりだよ？ でも、綺羅が、あの店はマスターの店だって、言ってた。何より、店が可哀相だよ。もっと、大事にしてやってよ」

マスターは、しばらく、考えているようだったが、小さく息を吐

き、

「あの店は、幸せだな。最初は、俺が一番、愛してると思ってたけどさ、……今じゃ、お客さんに抜かれちゃったよ」

「悔しくないの？ マスターの店なんだよ？ 可能性がゼロじゃないなら、頑張つてよ、お願いだから」

声大きい、と咎めながら、枕元のナースコールのボタンを押す。具合が悪くなったのかと心配していると、やがて入ってきた看護師に、

「先生に、一番早い日程で、手術をして欲しいって、頼んでもらえるかな」

宇宙がその言葉に驚いていると、

「こうでもしないと、毎日来そうだからな」

迷惑そうに言つて、再び雑誌を開こうとする。

「綺麗にも、連絡してやつてよ。今の感じじゃ、マスターより、弱つてるから」

すると、わかったわかった、と、面倒くさそうに携帯を手にとつた。

「あ、あのさ、それと、聞きたかったんだけど、」

帰り際、宇宙はふと、気になっていたことを思い出した。

「なんで、俺なの？ 綺麗の手伝いなら、もつと他に、いるでしょ。知り合いの、調理師の人とか、……千賀ちゃんとか」

すると、マスターは途端に、呆れた顔になる。

「馬鹿だな、ホントに。もし、店を持つことになって、手伝つてもらうなら、誰がいいかって聞いたら、宇宙くんがいいって、言ったんだよ」

馬鹿はさっさと帰れ。そう言つて、電話をかけ始めた。

僕たちの夢

カラン、カラン、カラン

ロックアイスがグラスにぶつかる音が、早朝のカフェの店内に心地良く響いている。この空間では、そんな音も、癒しの一つ。縦長の窓から入る朝の陽射しと、店内の照明は、どちらが主張することもなく、流れるヒーリングミュージックは、聞いていなくても、自然と耳から流れ込んで、乾いた心を満たしてくれる。至る所に置かれた、鉢植えの観葉植物は、手入れが行き届いていつも瑞々しく、活き活きとして……、

「あ、」

昨日、水をやり忘れたのか、少しだけ、元気のない鉢植えを見つけて、宇宙は声を上げた。そのまま厨房へ持って行って、水をやるうとすると、

「宇宙、ここは、料理をするところだから、ダメだって言ったでしょ？　ちゃんと、外で水をあげて」

「……、」

「それと、今日から五月だから、」

「解ってるよ。飾り付けを、替えるって言うんだろ？」

宇宙が答えると、とろけるような笑顔で、頷く。この店は、季節ごと、イベントごとに模様替えをしているのだが、選び抜かれた雑貨や、そのレイアウトはセンスに溢れていて、窓際の席に座った客も、外の景色より、手の届く場所に飾られた小物やポストカードに気を取られていることが多かった。マニアなら相当な額をつけるであろうアンティークものも、無造作に置かれているため、そうとは知らない子供が、少々乱暴に扱っている時もあるが、そんなことは気にしない。

宇宙は倉庫から雑貨の入った段ボールを運んできて、自分なりに作ったスクラップブック片手に、模様替えを始めた。今だから解る

のは、あの家具メーカーで毎日遅くまで働いた経験が、ちゃんと役に立っているということ。無駄な時間なんて、きつと何処にもない。そう思えた。

「こんなもんかな」

棚の上の雑貨の配置に満足した宇宙は、少し離れたところから、その出来映えを眺めてみた。

「馬鹿、離れたところから見たって、意味ないんだよ。お客さんは、そこに座って眺めるんだからさ」

「え？」

振り返ったが、そこには誰もいなかった。しかし、宇宙は、棚のそばの席に座って、もう一度、並べ直してみる。そこには、誕生日にマスターにもらった、ブリキの車。動かしてみたら、涙が出た。

「それね、マスターの、一番のお気に入りだったんだよ？」

いつの間にかそこにいた相沢が、そう言っつて、宇宙の向かい側に座った。

「このお店を作ったとき、一番最初に飾ったのが、その車なんだつて。いつか、こんな車に乗れる日が来たらいいな、つて」

ついに、その車を手に入れるときが来たから、次の世代に、譲つた。夢も目標もなかった、宇宙に。

「……いい話だね。そのマスターに、会ってみたいよ」

側で話を聞いていた年配の男性客が、そう言っつてブリキの車を手に取つた。ジツと、その車を見つめる彼の目は、プラスチックの小さな窓を通して、遙か遠い場所にあるものを探すかのようだった。

「君の、夢は？」

不意に尋ねられて、宇宙は涙を拭き、迷わずに、こう答えた。

「この店を、ずっと、続けていくことです」

「そうか」

嬉しそつに、頷く。それなら、あいつも安心だな。その年配の客は、そう言っつて、帰つて行つた。

「……マスターの、知り合いだったのかな」

「そうみたい。……また、来てくれるといいね」
とろけるような笑顔で言って、さあ、そろそろ、忙しくなるよ、と、腕まくりをした。

病床で、マスターは二人に、こんな話をしてくれた。駅前のお店には、この街の人はもちろん、他にもいるんな街の人が、訪れる。結婚式の帰りや、お見舞いの帰り、デートの待ち合わせや、試験勉強の場所にするお客さんもいれば、時には、海を隔てた、遠い遠い街の人が、やってくることもある。

「でも、まだ一度も、来てくれてない人が、いるんだよな」

それは、彼の、父親。

「まだ、怒ってるのかな」

大手の銀行に父親のコネで就職したが、どうしても馴染めなかった彼は、出世を約束されていたにもかかわらず、三十半ばで勝手に辞めてしまった。そのことで、殆ど絶縁状態になり、儀礼的な年賀状のやりとり以外は、一切、なくなったのだという。

「悔しくて、毎年、店のハガキで年賀状を送り続けたよ。それも今年で、終わりだな」

そんな会話を思い出した宇宙は、さっきの男性客の伝票を、もう一度、見てみた。

「綺羅、マスターの名字って、高橋、だったよね」

厨房で作業をする相沢に、声をかける。相沢も、同じ事に思い当たったようで、

「……今の人、もしかして、」

二人は顔を見合わせた。

「来てくれたんだ」

「良かった！」

今日も、良い一日になりそうだ。

チワワを連れした老夫婦が、おはよう、と言いながら入ってきて、まるで自分の家のリビングのように、いつもの窓際の席に座る。ウ

オーターグラスとメニューを持って行くと、
「宇宙くんの接客も、慣れれば悪くないね」
そんなことを言っつて、からかった。

『La chaise du poste』

ここは、駅前のカフェ。フランス語で、駅の椅子、という意味の、
アットホームな雰囲気の評判の店だ。二代目のマスターは、パティ
シエとしても有名で、つい先日、世界的に有名なコンテストで賞を
受賞したばかり。

「初めて食べた時、どんな感想でしたか？」

あらかじめ、予想していた質問に、宇宙は迷ったフリをして、答
える。

「ビックリするほど、愛を感じました。それ以外に、表現する言葉
が、見つかりません」

「……愛、ですか、」

まさかそんな答えが返ってくるとは思わなかったらしく、その女
性記者は言葉を失っている。月並みに、食べたことのない美味しさ
で驚いた、などと答えると思ったら、大間違いだ。

「受賞されてから、相沢さんに、何か大きく変わったことは？」

「特に、ありません。彼はずっと、この店のパティシエだったし、
これからもそれは、変わりませんから」

彼は、コンテストで受賞するために、パティシエになったわけ
もなければ、有名になりたくてコンテストに出たわけでもない。客
を、笑顔にするために、目の前の、たった一人の笑顔を生み出すた
めに、ここで働いているのだ。それは、このカフェに通う常連客な
ら、誰でも、知っていること。

「最後に、相沢綺羅さんがどんな人なのか、教えてください」

その質問に、宇宙は再び、迷ったフリをしながら、「星のように、輝いている人です。その輝きは、努力と才能の、結晶だと思います。僕は彼を、心から、尊敬しています」
ようやく、宇宙、と呼んでくれるようになった。敬語も、やめるように、努力してくれるようになった。それでも五回に一回は、間違えてしまつて、すみません、と謝るのだった。

「マスターがね、いつも言ってたんだ。おまえには、自信がなさすぎる、って」

表彰式でもらつた、大きな皿のフチを、指で辿りながら、相沢が言った。世界のパティシエのコンテストに出て、一等賞になれば、自分の実力が解るだろうから、それを目指して、頑張れ。その言葉を実現したけれど、朝四時に店に入る生活は元のまま、夕飯に試作品のケーキを食べるのも、変わっていない。変わったのは、こつやつて、入れ替わり立ち替わり、新聞や雑誌の記者がやって来たり、金儲けに結びつけようと、ケーキの量産をしないかと、怪し気な営業マンが不愉快な勧誘に来ることくらい。相沢は、自分の手で作れるだけしか、提供しないと切り切った。それが自分の実力だし、それ以上の評価はもらえないのだと。

「それで、少しは自信、ついた？」

尋ねると、相沢は少し迷つて、頷く。

「今でも、初めて作ったケーキを出すときは、不安だし、泣きそうに緊張するけどね」

あのときのトラウマなのだろうか。宇宙は、初めて彼のケーキを食べて、心にもないセリフを吐いてしまったことを思い出して、苦笑した。あの時は、こんなふうに、二人で店に立つことなど、想像もしていなかった。

「でも、宇宙が美味しいって言ってくれたら、自信を持って、メニューに載せられるんだ」

今度は、からかうように宇宙の目を見つめながら、

「だって、このお店で、一番厳しい、お客さんだから」
だから、これからも、よろしくね。とろけるような笑顔で言われて、宇宙もつられて笑った。

『大貴さま マスターの車の乗り心地は、いかがですか？ また、乗せてくださいね』

『美紀子さま ボディボードは、上手になりましたか？』

『吉井さま 大きな鯛は、釣れましたか？ また魚拓を、見せてください』

相沢が先に帰宅して、カフェに一人になる時間。伝票の整理をしながら、相沢が客に宛てて書いたメッセージを読むのが、宇宙の楽しみになっていた。宇宙も同じように、メッセージを書いているが、意外に気の効いた言葉を選ぶのは、難しい。それが良く知る相手に向けてとなると、尚更だった。……結局、相沢には、未だに何一つ勝てないまま。宇宙は軽く溜め息をつきながら、再び伝票を捲っていく。

『千賀さま 今度、一緒に映画を観に行きませんか？』

まだ、伝票に書いてるのか。今度は可笑しくて、吹き出した。さらに捲っていくと、最後の一枚になる。オーダーも金額も、何も書いていなくて、裏返してみると……。

『宇宙さま いつも手伝ってくれて、ありがとう。綺羅』

こちらこそ。宇宙はそう呟いて、店の戸締まりをし、すっかり夜

になった外へと出た。見上げると、遠い夜空に、星がキラキラと輝いている。……久々に、客席で美味しいアイスティーが、飲みたいな。そんな事を思いながら、駅へと続く雑踏の中を、歩いた。

僕たちの夢（後書き）

最後まで読んでくださった皆様、本当にありがとうございました！
「kirakira cafe」は、いかがでしたか？

私を含め、日々の生活に満足していない、たくさんの方々の社会人の中の一人に、スポットライトを当ててみました。

宇宙は勤めていた会社を、辞めたわけですが、そうはいかない人のほうが、多いはず。（これも、私を含め。）でも、そんな日常の中で、何か光るものを見つけて、追いかけてみると、別の道が、見えてくるのかもしれない。それがなかなか、難しいのですが。

最後に、このお話が、少しでも、読んでくださった皆様の癒しになれていたら、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1480v/>

kirakira cafe

2011年8月11日23時38分発行